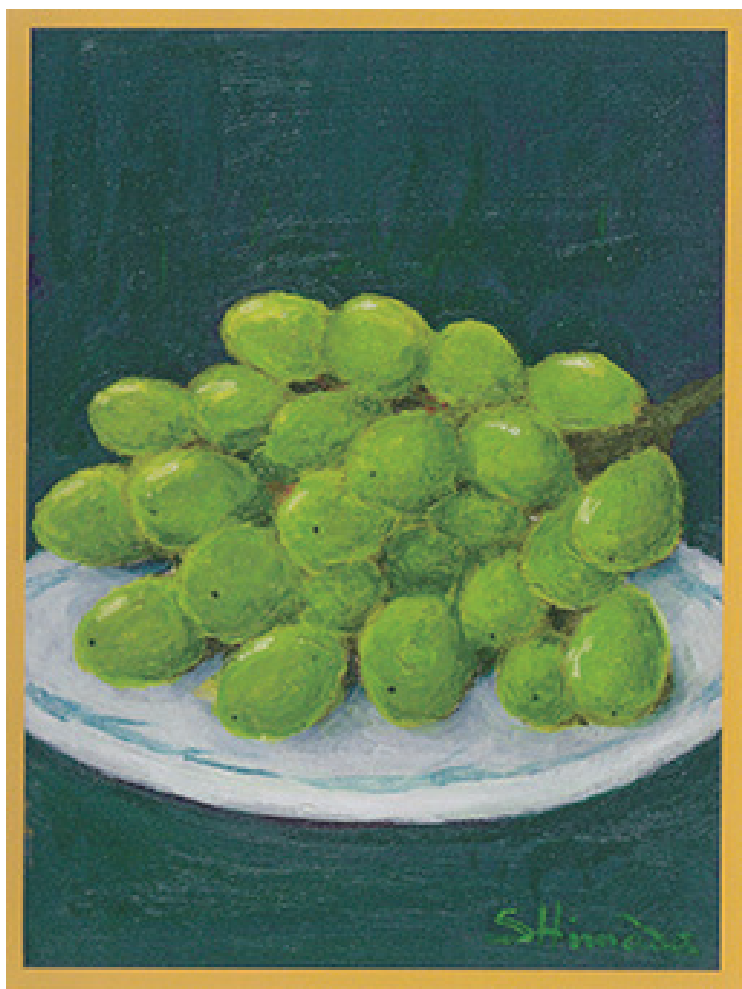


冬 雷

短歌雑誌

TOURAI

二〇二六年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十五卷第一号（通巻七六七号）



1 月号・2026 年

表紙絵について

童貞のするとき指に房もげば葡萄のみどりしたたる
ばかり 春日井 建

葡萄の歌と言えば真っ先にこの歌が脳裏に浮かぶ春日
井建の代表作の一首だ。

春日井建がこの歌を詠んだころは、シャインマスカッ
トは日本には存在していなかった。

調べてみると一九八八年に旧果実試験場安芸津支場で
「安芸津二十一号」と「白南」を交配して誕生したとあり、
その後品種改良を重ね現在に至って居ると言う。

二〇〇六年に「シャインマスカット」として品種登録さ
れた葡萄としては極めて新しい品種である。私は多くの
葡萄を好むがこのシャインマスカットは格別である。

美しい緑、皮ごと食べられしかもその歯ごたえの素晴
らしさは追隨を許さない逸品である。

今年一年間皆様の歌のお伴が出来ることに喜びを感じ
ております。

皆様のご健勝を祈りながら表紙絵とする。

嶋田正之

2026年1月 目次

年頭にあたり、今後の進む道を探る……………	大山敏夫… 1
冬雷集……………	3
作品一……………	24
一月集……………	40
作品二……………	48
作品三……………	58
十一月号冬雷集評……………	桜井美保子… 18
十一月集 / 残響集評……………	鈴木やよい… 19
大友柳太朗と美空ひばり⑧……………	大山敏夫… 20
十一月号作品一評……………	小林芳枝・藤田夏見… 38
十一月号作品二評……………	井上菅子・江波戸愛子… 44
十一月号作品三評……………	山本三男・橘 美千代… 46
十一月号十首選（冬雷集・十一月集 / 残響集）……………	58
十一月号十首選（作品一・作品二・作品三）……………	60
歌集 / 歌書御礼……………	編集室・佐藤靖子… 63

年頭にあたり、

今後の進む道を探る

大山 敏夫

皆様。いよいよ新しい一年がはじまります。

その状況に立って、明るく威勢の良い、そしておめでたいことなど論い、幕開けとしなければならぬのですが、現実はかなり厳しい諸般の事情があり、そうならないことを先ずお詫び致します。

昨年の小誌東京大会の挨拶の折にも申し上げましたが、今の時代に昔ながらの短歌雑誌を月刊で作り、健全に運営してゆくことはかなり困難になっております。ここでは、あらためてそういう事情を述べて、皆様のご理解ご協力をお願いするものであります。と申しても、これは小誌に限定される事情、問題ではなく、現歌壇における大多数の結社雑誌にほぼ共通するので、小誌会員の皆様が必要以上に深刻になるものではありません。

歌壇の総合雑誌等で制作する「短歌年鑑」の情報を調べてみれば、どなたでも解ることですが、現歌壇にどれくらい短歌雑誌があり、その実態がどうなっているかを考えてみると、数的には、昭和の時代と同じようなレベルを保持しているかと思われるものの、著しく違うのはその会員数であります。少数の大結社誌と、弱小結社誌という二分化状況で、中

間的な所の少なさが異常です。そして刊行形態としての月刊誌も大きく減少傾向にあり、隔月刊誌、季刊誌がどんどん増えております。それに伴い、総合雑誌と言われるものまでが、隔月刊に移行始めているのが現状です。これは何を意味するのか。つまり常識的に考えて今の時代では月刊誌の存続は容易ならざるものがある、ということです。

何が大変なのか。先ずは運営資金がままならぬこと。それに加えて、どこの結社雑誌も会員の高齢化が進み雑誌を作り続けてゆく体力、能力の欠如があります。雑誌の運営にはこの二つの要素が必須です。いわゆる普通の健康体でなければ、雑誌作りなど無理なのです。

具体的に申しますと、現歌壇においては、会員数が二百名以内のところは圧倒的多数です。それどころか、その半分は百名以内という深刻さです。数年前にわたしが誌上でも述べてきたことは、雑誌を赤字なく運営できるには会員数二百名が必要だということでした。その時点で小誌はその数を下回っており、そのあたりのマイナス面を運営のシステムを変えることで補って参りました。その具体的な事例は、本誌巻末に転載した桜井美保子氏の書いた角川『短歌』二〇二五年十一月号掲載の「結社・歌誌・歌人動向 うたの場」をご覧ください。

小誌は一九九九年末に創設者木島茂夫先生から引き継いだ運営資金の金額を二十五年過ぎた今でもきちんと確保し続け

ております。多少のインフレ化もあり、その金額に当時のままの価値は伴っておりませんが、その額を減らさずに四半世紀運営し続けるのは並大抵のことではありません。その点は密かに自負するものがありますが、さらに現状は厳しさをましているのです、さらにパワーアップした対策を講じなければ継続は困難かと考えます。

小誌「冬雷」は、今後迎えるであろう会員数「百名の壁」に備えて、それでも存続可能な雑誌運営を模索します。そのためには会員の皆様のご理解、ご助力が必要で、最小限の「痛み」を共にしてくださるようお願いすることになるでしょう。先ず目指すのは諸規定の見直しです。現状では現実に沿っておりません。年会費のことも、投稿規定のことも改訂が必要です。本年一年間をその準備期間として、細かく検討してゆくことに致します。その進捗状況を並行して誌上に公開して、会員の皆様のご賛同を得たいと思います。いずれにしても実際に変化して動くのは二〇二七年一月以降となります。

とはいえ、小誌の直面する会員数「百名の壁」問題は逼迫しております。この対策だけは即刻に開始する必要があるでしょう。そこで、本号より編集後記の二段を使い「冬雷カウンター」を設置します。これは企業などでよく見聞きする「見える化」の試みです。こういう数値はどこの結社でも隠したいことなのでしょうが、読者がその気になれば簡単にわかることですし、小誌では積極的に開示してゆき、その情報を会

員の皆様と共有し、その数値の示す意味をリアルタイムで考えて参りたいと思います。

カウンターには、その月の作品欄別の出詠者数を表示し、総数もカウンター画像の中に示して参ります。その数値の下に「対前月比」の数を入れます。これがプラスになるのなら素晴らしいのですが、常識的にはマイナスが見込まれます。ならばそれも、意味深いマイナスにしたいですね。

今月からスタートします。皆様、どうぞ毎月必ずご覧下さい。そして、一致団結して、「冬雷」としての「百人の壁」問題と取り組んで参りましょう。

よろしくお願い致します。

本号よりの作品欄異動の方々（敬称略）

◆作品三欄から二欄へ↑ 井出裕子・岩村知康・金子八重子・首藤文江・高藤朱美・立石節子・塚本節子・羽田孝輝・山崎 猛（以上九名）

◆作品二欄から一欄へ↑ 植松千恵子・川上美智子・川俣美治子・大野 茜・小林貞子・永野雅子・本間志津子（以上七名）

◆作品一欄から冬雷集欄↑ 飯嶋久子・戸部田とくえ・飯塚澄子・稲津孝子・江藤ひさ子・鈴木やよい（以上六名）

冬雷集

新表紙絵

大山 敏 夫 埼玉

一年を怒涛のうちに過ぎ来てシャインマスカットの新表紙絵を知る

新表紙絵のシャインマスカットそこはかとなくにほひたつ絵の具のみどり

表紙絵をつつみたる紙のすひこみて滲むてん緑の絵の具

ひさかたのシャインマスカット光まと皿のうへにあり女性のごとく

シャインマスカットは房の芯までみどりだと聞けばしばらく頭に描く

シャインマスカットはタネも無く皮を剥くことなくそのうへ甘く汁もたつぶり

シャインマスカットの実の内部よりしみいづる光のごとき甘みと思ふ

春日井建氏ぼくは人でなしの「建」ですと言ひしを思ふ葡萄を見れば

古き映画にてはにほへるをみなごも葡萄くふときにプツとタネ吐く

赤間 洋子 東京

多摩美術大学名誉教授よりメール届く絞り染展への出品要請

審査終へ我が作品も展示さる有名作家の作品に並び

殆どが濃き藍色の作品で技法も複雑驚くばかり

我が作品は藍の色合ひ柔らかく立体的なる特色を持つ

新制作展とは異なる雰囲気満ちてをり身の引締まる思ひにて見る

受付に立ち居る一人は旧き友共に藍染学びしことあり
互ひに懐かしみつつ会場を巡り絞りの技法の複雑さを語る
優秀作品の応募数多なれど会場狭く落選ありと聞く

兼 目 久 栃木

水中のせりは花をなびかせて緑濃き色を小川にゆらせり
六月から九月まで暑い日が続きたり秋を飛び越し冬は間近に
第3戦ワールドシリーズ野球試合大谷翔平4度敬遠さる
懇切な友との連絡途切れると賀状販売日購入者言ふ
昼飯の時間がすぐに来たるなり朝刊新聞読みつつゐて
67歳胃癌により死去したり50年前の父の有り様を
百歳まで生きると母は生前に豪語したり84歳死去
道ばたのつなぎめより芽を出してハキダメギクが一メートルも伸びる
長女は孫ら二人の女子を産みわが家より三十分の場所に住みたり

森 藤 ふ み 東京

スーパ―の花壇に植ゑある白薔薇の三十本ほどみな造花なり
長崎に三年振りの仕事なり期間は九日と娘の言ふ
降り頻る雨の早朝出かけたる娘に気づかず我は眠りをり
子の嫌ふカット野菜と秋刀魚買ひ一人の食事子の戻るまで
具沢山の味噌汁好む子戻るまで二三の具を入れ一人分作る
大雨の夜中に娘の帰りくる長崎みやげをたくさん買ひて

帰りたる娘の土産広げつつ気になる物を二人で味見す
久々に来る公園気にかかる皇帝ダリアの花の揺れゐる

国勢調査 櫻 井 一 江 東京

五年前難儀せし調査に比ぶれば改善されしとぞ断る間なく
真夏日の続く九月の月初め役所より届く調査書類三箱
大寫しの顔の貼りつく調査員証首より下げてタワマンポストへ
タワマンの担当区域の我ら六人投函の許可待つ管理人室前
我が担当二六八戸のポスティング一氣に進める一時間余り
タワマンに地権者とし住める調査員の仲間在り時に助言受けてつ
調査票に次いで一週間後十日後のチラシの投函済ませる終盤
最後なる調査書類の清書こそ神経とがらす仕上げの作業
肩の荷を下ろすが如き調査員のしごと成し終へ浴ぶる秋の日

富 田 眞紀恵 富山

公孫樹の葉どんぐりの樹ととりどりの色に染まりしあの秋の庭
幼らの明るい声が聞こえて柿の木ゆれる昼さがりかな
父の背の広き母の手のぬくとさをしみじみ思ふ今日の月見て
もう二度と会へない父母を思ひつつ明日もあへるけふの月見る

有 泉 泰 子 山梨

コーラスの発表会なり胸はりて母と歌ひし童謡唱歌を
幼なき日母と歌ひし唱歌など仲間と歌ひぬ大きな声で

若き日に父登りしとふ甲斐駒ヶ岳のりと立ちゐる雪帽子はまだ
付添ひを断り買物に来てみるも忘れ物多く夫に叱らる

「時計台の鐘が鳴る」との曲を聞く訪ねてみたし夢の中でも
干柿を待ちくれゐたる父母なりき百目柿求め遺影に供ふ

青木初子 神奈川

この年の秋刀魚は形良く豊漁とスーパー巡り二匹を求む

脂ののり良きは口先黄色といふ秋刀魚探せど売り場にあらず

庭前に建ちたる二階の壁高く居間まで朝の陽差さぬ二時間

四十年平屋のままの隣家に欠けることなく朝の陽届く

朝の陽の届かぬ庭の広がりにて花苗球根注文減らす

この夏の暑さに体力追いつかず花苗諦め野菜の種撒く

胃潰瘍の薬の効きて体力の戻れば夏の荒草を抜く

花鉢の一つ一つに土を入れブロッコリーの苗来るを待つ

花の芽を持たざる小さき球根も命のあれば無下にはできず

吉田綾子☆ 茨城

夕間暮れ訃報の入りて跪く瞬時現る姉のまぼろし

あまりにも突然なりし姉の死に儘ならぬまま床に入るのみ

花好きの姉に相応し百合や菊白装束は生花にうずもる

我が家の「総領娘」と言われつつ育ちし姉は律儀で優し

嫁ぎ来し農家の不慣れな作業をば悲鳴あげつつ努力重ねし

稲作からハウス栽培に切り替えて胡瓜トマトを専業とせし

引き受けし研修生との大所帯切り盛り一筋手腕をみせし

なかなかのお洒落な姉は衣裳持ちかつら等をも柩に納む

母を悼む息子のことば「これからは天より神と母がみている」

山口 嵩 福島

泥沼に填る危惧する自維合意翼賛政治の微かな臭

今さらに公明党の重さしる自維に纏はる右巻きの風

防衛費五パーセントを目指すかぜ教育・福祉は夙のなか

トランプをノーベル賞に推すといふ惨めに感ず総理の忖度

物価高肌で感ぜぬ人たちの経済施策はその場しのぎや

せせらぎの音も冷たき秋の夕うつせみ一つ茜に染まる

夕焼けがそそくさと消えて浮かびくる赤燈二つ送電塔に

青空に黄いろ映ゆる花梨の実あすは漂ふ焼酎の中

中村晴美 茨城

晩秋に夏花片付け鉢の空く次は春咲く球根準備

十月の下旬なのに肌寒し大雪の冬ひさびさに来るか

スタッドレスのタイヤは氷上も走れるらし冬の不安解決の予感

初に履くスタッドレスタイヤ予約せり保管も含め高額なれど

家裏のドウダンツツジ紅葉す風当たり強き北東側から

枯れかけの畑の草を撤去せり風ひんやりと作業の進む

在宅の夫とふたりラーメン店へ一年ぶりの晩秋の昼
低緯度に赤きオーロラ不気味なり太陽フレアに翻弄さるる

橋本文子 鳥取

子守歌我が子と孫に歌ひたり今ひ孫にもそろつて歌ふ
ごくごくと幼き口を動かして母のお乳を一心にのむ
育ち行く幸せひたすら祈りつつ皆で見守る幼子の寝顔
幼子の父と祖父とで二人して沐浴させる日もあると聞く
子育ての日々はスマホに記録して細かき事も共有するらし

酒向陸 江☆東京

彼岸まで真夏日夏服夏布団一氣に冷え込みセーター羽織る
医療費の削減施策と国立市歩いた分だけポイント溜る
猛暑日は散歩かなわず待ちいたる秋は雨降りなかなか歩けず
それぞれの欠席届けに訳ありて病院仕事孫の出産

八十で歌えることの諸条件喜びとして発声練習
年齢を考え尻込みする私先生夫婦は米寿に近し

合唱はラジオ体操に始まりて腹式呼吸の動きも加わる
ニコニコと誘い下さる先輩はおしゃれ上手な九十六歳

天野克彦 大阪

梢より音なく降りくる団栗の時にはありて落葉に紛る
昼の虫すでにこゑなき庭の雨ただひそやかに降り続きをり

虫のこゑすでに絶えたる部屋に臥し数かぞへをり眠りを待ちて
夕焼けの雲にむかひてゆく鴉おのもおのみにこゑ交はしつつ
夕風の寒くなりゆく公園に毬蹴り遊ぶ子供らの声

老いゆゑか四季の移ろひ身にしみて草木によする思ひの増しぬ
孫ひ孫家族十八人集ひきてわが生日を祝ひ呉れたり(十月十五日)
しみじみとわれがひと世を思ふかな「人間万事塞翁が馬」

高松 美智子☆ 栃木

「アレクサ」と九歳男子がAIに明日の天気と服装を問う
灯り点け音楽流して風呂を沸かすネットワークは魔法のランプ
「ありがとう助かったよ」と声掛ければ「いつでもどうぞ」とAI答える

二人称で声いろ換えて独語言う認知の人の帰宅願望
おおかたは確認事項の独り言われの不安をわれが宥める
電話では話の通じぬ母となり一方通行の会話が続く
長生きはもうたくさんと言う母が幼き頃の辛さ口にす
行き場なき育ちし頃のわだかまり老いても母を苦しめている

高橋説子 栃木

三陸のあまちゃん列車の窓に探す七階建てなる友のアパート
大船渡の新堤防まで歩みゆけば遠くに奇跡の一本松見ゆ
どれだけの思ひを秘めてこの海のかたへに立つか一本松は
永く永く倒れてはならぬ一本松の奇跡は鉄の芯棒にあり

レプリカといへど凜と立つ一本松に近より難き怖ろしさあり
お祝ひは母の日だけでと言ひをれば静かなるひと日「敬老の日」は
補聴器を外し眠りの深みへとゆく吾を待つかスーパームーンは
手を脚をなだめなだめの三連休は映画の梯子をするしか無いさ
ハンドルを持てば寄り来る蚊がひとつ天野さんちの蠅思ひ出す

大塚 亮 子 東京

方言に父の語れる昔話はなぜか大好き幾度もせがむ
夜なべ仕事してゐる母の傍らに居眠りしつつ父の声聞く
空き家となりたる生家思へど墓参のみ済ませて帰る墓掃除して
街に会ふ知る人減りて駅までの道に挨拶交はす人なし
人変はり街並み変はりふる里に昔の思ひ出探せず帰る
「とき号」に胸躍らせて乗らし思ひ出遙かとなりて歳重ねをり
回数券に帰郷したる思ひ出は遙かとなりて駅弁を買ふ

川底の石

嶋 田 正 之 埼玉

産土の墓誌に刻める享年に米寿超えたる名前のあらず
戦争に翻弄されたる昭和なり父三十三叔父二十八
七歳の父の記憶はおぼろなり鴨居に飾る肖像画のみ
絵を描き歌詠み日々を過ごしゆく筆折る時の何時か知らねど
カハセミの執念のごと川底の石の形に眼を凝らす
百号に描く油彩を都美術館会場に置き一つの区切り

次に描く対象探す行動の不自由となる足老いたれば
夥しき作品群の行く末を思へば寂し想へば空し
些細なる悩み事など嘲笑の相手ともせず深き星空

江波戸 愛 子 ☆ 埼玉

連休の一日を娘の運転に茨城県的那珂湊まで
寄る波に逃げては戻りまた逃げる那珂湊の浜にしばらく
寄せる波みながら想う遠き日に叔母と歩いた九十九里浜
那珂湊おさかな市場の駐車場一台出でたるそのあとに止む
昼食は去年の店と決めてゆく今年は待たずに店内に入る
魚市場出でて干し芋買いに行く留守居の娘と友への土産
那珂湊また来年と離れ来てめんたいパークに寄り道をする
昨年は町会旅行にこの年は家族で来たりめんたいパーク
中トロと赤身の鮪をもとめきて中トロこえる赤身の旨さ

橘 美千代 新潟

二十年経つ洗濯機排水のホース劣化し水漏れはじむ
ひと月半の赤児の濯ぎものありてすぐ洗濯機を買ひに走るも
新しき洗濯機四日後に届きまちなかねたりと思ひきり洗ふ
みどり児の声して娘夫婦ゐてこの生活にいつしか慣れて
ベビーベッド肌着にオムツ調乳器具はこび出されり引つ越しのごと
みどり児連れ娘夫婦の帰りゆき静まりかへる家に猫とわれ

ベビーベッドの置かれてゐたる空間のぽつかりと開き日差しのため
街路樹のハナミヅキはや紅葉の終りちかづく孫みてる間に
雨風の枯葉巻き上げ吹きすさぶ記憶の底ひかき立てること

ブレイクあずさ☆ カナダ

知らぬ人同士の言葉交わされるアカオノスリの来たる木陰に
向けられる数多のカメラに目もくれずノスリの世界にノスリは生きる
ノスリ食む小さき肉塊朝までは隣家の屋根に遊びし鳩の子
菩提樹の枯葉音なく降りつもるとうに動かぬ小鳩の翼

戦没者追悼記念の式典に集う人らの肌色さまざま（11月11日）

バグパイプ鳴らしパレード伸びてゆく霜月の空澄み渡りおり
追悼に読み上げられたり女川に死せるカナダの兵士の名前
爆弾を落とされ焼かれし女川の市民のことに触れる者なく
卯嶋さんの家のカラスはクロと知る我が家に通うカラスと同じ
野生へと戻ししのちも朝朝に我が家に寄りぬカラスのクロは

鈴 木 やよい 東京

ただ待つは無駄と思ひし頃あれどまんざらでもなし鱗雲浮かぶ
秋になり運動したしと参加する三百円のチケット買ひて
手頃なる市のレッスンで先づ試す続ける自信の持てぬ吾ゆゑ
公園の遊びに夢中か自転車のかごに残るは食べかけの菓子
目覚めても疲れ引きずる吾に言ふ甘き柿あり天気も良しと

黄に輝く公孫樹に見とれ遅れたり夫を追ひて急ぎペダルこぐ

中 村 哲 也 宮城

生憎の雨の土曜日昼下がりに地下鉄通路に人は少なし

東京の地下鉄出口や階段に狭き事ありいつも驚く

地下通路抜けてそのままだどり着く美術館へと雨に濡れずに（三井記念美術館）

展示室入ればすでに人だかりいつもの静まる雰囲気違ふ

いやまして人で賑はふ美術館若冲応挙の屏風の故か

虎革の写生図に見る虎のぬぬ国に生まれし応挙の腐心

金箔の高価な屏風に黒々と果敢に描きたり若冲応挙は

根津美術館に至る歩道を横並び歩く女性が傘差し塞ぐ

飯 嶋 久 子☆ 茨城

雲一つなき空青く広がりて友の手術の成功祈る

晩年の母縫いくれしかいまきに包まれて寝る肩までぬくし

三人の娘に一枚ずつかいまき残しこれでおしまいと母は逝けり

リハビリに一日三千歩目指しおり今日は湊線の踏切りまでを

カンカンと間もなく来るか湊線花の季すぎ乗客まばら

「歳にしては」の前置きありて骨密度よし治りも早しと医師に告げらる

上半身かたきコルセットに守られて圧迫骨折の治療はすすむ

山 本 三 男☆ 群馬

球根のチューリップ植え多分来る来年の春を楽しみに待つ

キッチン今日は休みと妻言いて弁当買うにわれ安心す
 新たなる面倒ひとつわがスマホ機種変更が必要となる
 サボテンはもう増やさぬと決めたるにダイソーで見て買ってしまった
 散歩路に今日吹く風の冷たくてからっ風吹く季節の近し
 川中に十羽ほど居る鴨見れば今日は楽しく散歩路を行く
 妻もまた午前三時に起きだして別々の部屋で朝まで過ごす
 朝焼けに木々と人家のシルエツト遠くに見えてその影低し

田 端 五百子 岩手

土曜の夜は子らを待らせ「肥後守」で鉛筆削りくれしよ父は
 葉桜と共生なすか絡む蔦夕映えの中赤々と萌ゆ
 身ぐるみをはがされたる案山子土手枕に二本の骨となりて転がる
 皮剥ける柿は朱色を鮮やかに光を浴びて飴細工と透く
 睡蓮の水の余白を埋めゐて今日舟を引きレンコン収穫
 バス停の前に一脚のベンチあり都会の夕日座らせてゐる

飯 塚 澄 子 東京

定年退職過ぎたる頃に書の新先輩入会勧めくれ「冬雷」に入る
 ご指導を小林先生更にまた桜井先生と手厚く受ける
 「冬雷集」の先輩方の作を読み九十五歳の先を案じる
 棚に置く『作品年鑑』開けて見る全作品の合同歌集を
 ちぎり絵の作を毎每年都展に出す今年は姉の百寿の姿

坂東の日舞の師範姉君に名取の栄誉我は世話受く

江 藤 ひさ子 大分

緑葉の合間合間に小粒寄せ赤黄色に咲く金木犀の花
 グランドゴルフ始めて数ヶ月の今日もまた五ホールコースにてホールインワン
 帰路に逢ひたる友にホールインワンの賞品をどうぞと渡すそれも爽快
 面識の無き友の娘さんからメール来る「母に時々電話してくださいね」と
 折見では電話かけゐつ施設に入りて二年目となる親しき友に
 電話しても通じたること全く無し施設の生活不透明な友

戸部田 とくえ 福岡

慈悲といふ言葉に癒されてその心根を育まぬとけふ暮れたり
 酔芙蓉朝日に輝く白砂のベニへと染まる営みしみじみと
 こだはりをもたぬ暮らしにつくづくと老いてゆく身の悟りの歩み
 すぐにまた忘れてしまふ置き場所と思ひつつ入るる花ばさみ
 体調をくづしてしまふこの朝も餌を待つ目高に促されつつ
 全体に蔓延る畑の草取りに思ひ立ちたり夕立ちのあと
 珍しく柿にカメ蟲の被害なく日毎ましゆく茜あかねの鈴生り

稲 津 孝 子 福岡

水の禍の能登の穴生の運動場の水の溜まりに鵲鴿が飛ぶ
 物干に娘と作る干柿を両手で揉めり十六夜の下
 備蓄米食べて暮らすといふ息子に友の作りたる新米送る

改築の柱に刻む子供らの背の見えなくなりぬ二世帯住宅
紫蘇の実を摘みある横を頑張れと言ひて舞ひ上がりてゆく蜆蝶
月曜日居合の稽古に来て我の安否確認してくれてゐし彼
雌が雄を背負ひて跳べる不思議さを思ふ事なかりきおんぶばつたに
わが庭に命終はりし殿様飛蝗枇杷の根方に埋めてやりぬ

姉 川 素枝子 福岡

遠眼鏡の上に拡大鏡かけて歌つくれるを哀れむなかれ
重陽の日と言ひてより幾日過ぐ筑紫山地に立てる白雲
青空に浮く白雲を貫ける飛行機雲は短かく切れつ

修行せよと声するごとき日のありて手足動かす画面の音に
室籠りをれば誰かれ顔出して生きてゐるかと声かけて行く
何事もなき夕べにて「生命の不思議」読み終はりたり
延命利生と日にち来たり笑はする稚氣の息子にちらつく老いの
妻の片方に夫の顔して掛けてゐる倅の変面愛しと目にとむ
垂乳根は七月の雨に旅立ちき申し訳なしその年越ゆる

井 上 菅 子 山形

茎細き秋の草にも実を結ぶ潮風やさし荒浜海岸
大波に自ら潜りゆく男サーファーは幾度も幾度も挑む
遙か沖の外国航路の白き船紺碧の海に秋は深まる
靴下にランニングも干すハンガーに並らべて漁のゴム手が揺るる

生業の漁臭染み付く食堂に腹子疎らなはらこ飯食ふ
オープンゴルフのボール追ひある映像に時折入る小鳥鳴く声
靴下の甲の模様の針ねずみ伸びることあり縮むことあり
浴槽の縁歩くゆゑ不本意に蜘蛛を潰しぬ赦され給へ
電線より垂れたる蜘蛛の独り者秋の空澄む冷え冷えと

井 上 榎 子 新潟

自らの話のくぎりに相槌をうつ老多き彼岸の客間
境内に木材下ろしトラックは路肩を欠きて走り行きたり
この秋の天候不順のゆゑにてかわが山の木々の紅葉おぼろ
空高く紅葉の木々揺さぶられ響く暴風雨朝まで続く
秋晴れの光あまねく儲け日の十月半ばに冬囲ひ終る
三つ栗の実均等にして熟しをり熊除けにラジオ音量上げつつ挽ぎぬ
冬囲ひはやも終へたる境内の樹木の縄の結び目固し
境内の昔ながらの撓む柿欲しと人らがチャイムを鳴らす
常ならば愛想なき老いわれを呼び収穫途中の大根抱かす

一月の歌会、勉強会案内

◆冬雷ネット歌会（ホームページにて掲載）

*誌上掲載の次作品の中より二首を自選したものを、参加者全員
で批評し合う、開かれたもの。
(担当・桜井美保子)

◆川越歌会

1月17日(土) 午後一時～五時まで。

*JR・東上線「川越」駅西口より約五百メートル。「ウエスタ川越」

二階会議室5

連絡先

☎ 安川敏子 (090-4608-7265)
☎ 野崎礼子 (090-9971-8149)

十一月号冬雷集評

桜井美保子

何十年使ひ古したる毛筆の先が揃ひて
使ひ易しも 兼目 久
長い間、使ってきた愛用の筆。さらに
この先も役立ってくれそう。その筆を
手に、いとおしむような眼差しがある。
筆には書く人の魂が籠るのだろう。

缶ジュース二百個冷やし「マック」並
べ神輿の子等の労ひ準備 櫻井一江
「こどもまつり」の一連より。猛暑の
中で夏休みの子供達が元気に伝統の神輿
を担いだ。参加の子供達への「缶ジュ
ース二百個」という具体的表現が印象的。
活気ある祭りの様子が伝わる。

小雨降る一日となりて和みたり猛暑の
もとの草木と我 山口 嵩

この夏は異常なまでの猛暑だった。そ
ういう日々の続く中で救いのような雨の
一日。植物も生き返るし自分も安らかな
時間を過ごせる。暑さに耐えてきたのは
人間も草木も同じ。下句が簡潔でいい。

十一月集／残響集評

鈴木やよい

貰いたるオクラの苗が丈伸ばし八つ手
のような葉が茂りたり 川上美智子☆
冬雷の表紙飾りし花なればオクラの咲
くを楽しみて待つ 同

オクラの苗を貰い、育てている。丈も
伸びて葉も茂ってきた。そして何よりの
楽しみは冬雷の表紙にもなったレモンイ
エローの花。表紙絵に何か特別な思いを
抱く人も多いのではないだろうか。オク
ラの花を心待ちにしている作者である。

如何ともしがたき皺を年月の証と思う
この頃のわれ 川俣美治子☆

どうにもならないものは仕方がない。
自然の成り行きだ。視点を変えて考える
ことに賛成。心の安定に繋がる。

杖なしで歩けた日には嬉しくて思わず
握る暖かい手 安川敏子☆
機能回復のリハビリのようだ。訓練を
続けて杖なしで歩けた時の喜びは大きい
に違いない。「暖かい手」は作者のリハ

から松の林の奥に來たりけり落ち葉積
む道足沈ませて 天野克彦

あまりの暑さに避暑地でしばらく過ご
されたそう。自然との語らいも充分に
出来たのではないだろうか。から松林の
散策の場面が実感と共に表出された。

四十年を共に暮らしし姑なり最期のひ
と息を見守れたる幸 高松美智子☆
嫁いだ時より長い歳月をお姑様と共に
歩んで來られた作者。この世を旅立つお
姑様の最期の時を見守った優しい心に読
者も胸が熱くなる。謙虚で愛情深い作者
のお人柄の出た作品だと思う。

魚屋も八百屋もいつしか姿消し大きな
スーパ―建ちて幾年 大塚亮子
ひと昔前は個人商店が軒を連ねていた
が、スーパ―が進出して日常の買物もそ
こで足りてしまうこの頃である。時代と
ともに変貌した街への感慨。

隣屋の屋上にあるアンテナが輝く時と
かがやかぬとき 稲田正康
隣のアンテナがきらきら輝く時と、そ
うでない時というのは天候とか日差しに

ビリに寄り添ってくれた理学療法士の手
であろう。手を握り合って喜ぶ姿が目
に浮かぶ。

スーパ―に並ぶ目当ては備蓄米ひとつ
手に受け礼を言ふ客 大野 茜
ようやく備蓄米を手にすることができ
て礼を言っている客。それだけ切実だった
のだろう。スーパ―での一コマであるが、
米をめぐる困難な状況がよく表れている。

携帯をマナーモードに切り替へてメー
ル消しつつ受診待ちをり 松居光子
近頃の待合室では携帯を見ている人を
よく目にする。ただ、いつ順番がくるか
わからないので集中できない。メールを
消しながら待つのも一案だ。

ふるさとの母校に未だ荷を負ひて尊徳
像ありその足に触る 梶尾栄子
最近ではあまり見かけなくなった尊徳
像。まだ荷を負い続けていると思う作者
の目は優しい。懐かしい記憶が蘇ったこ
とだろう。

朝あさの躰操に着るけふのふく幌尻岳
の山と文字入り 益坂順子

よるものだろうか。あるいは心が晴れや
かな時、そうでない時の心理面からの見
え方か。同じものが違って見えるところ
に着目した作品。読者の想像を誘う。

五年以上医院続けむに必要と電子カル
テの導入決めつ 橘 美千代
開業医として地元の医療に力を尽くす
作者。患者さんごとの医療データを管理
するのに電子カルテ導入を決意された。
結句の完了形に強い意志が表れている。

親指を折りて歳をば教へる曾孫秋く
ん菌並らびよろし 姉川素枝子
お孫さんの一家が作者を訪ねてきた。
指で自分の歳を教える曾孫さんの愛らし
い表情や綺麗な菌並びが見えるようであ
る。歌には温かな眼差しが感じられる。

賑やかな所好まぬわねながら来てみれ
ば楽し新庄まつり 井上菅子
どちらかというと静かな所が好きな作
者なのかもしれない。新庄まつりに出か
けて楽しい体験をされた。賑やかな所も
また居心地がいいものなのだろう。新し
い自分を発見したような驚きがある。

幌尻岳は北海道日高山脈の主峰で、難
関の山とか。登頂した時の感動を思い出
すTシャツであろう。体操の時に着れば
気合が入りそう。

春植ゑし六百本のサルビアに水遣り叶
はず枯れてしまひぬ 羽田孝輝
春に六百本も植えて楽しみにしていた
であろうに。この夏は植物にとっても厳
しいものだった。「水遣り叶はず」に無
念さがにじむ。

歩数計五千歩過ぎて折り返す現実に戻
るまでの五千歩 児珠純子
家の近くに溪谷があるようだ。ゆった
りと心を遊ばせながら歩いている。そし
て五千歩過ぎたところで折り返す。ここ
からは日常生活の雑事に戻るための時間
だ。その感覚がよくわかる。

笑顔にて写真に映るこの人は笑顔失く
して幾年過ぎる 河原木光子☆
一連の歌から、認知症のお義母様と暮
らしているという。大変なことも多いと
思う。「この人」と言う距離感に作者の
悩みが表れている気がする。

大友柳太朗と美空ひばり⑧

—その短歌と情—

大山敏夫

福島泰樹氏歌集『蒼天 美空ひばり』の昭和三十四年の中に、なぜか大友柳太朗がこう歌われる。



東映「孔雀城の花嫁」でのスチール
大友柳太朗と美空ひばり

「孔雀城の花嫁」大友柳太朗その豪快な笑貌いつこ

映画「孔雀城の花嫁」(松村昌治監督)はこの年の四月公開で、現太上天皇の皇太子時代にその御成婚の祝賀の行われるのに合わせて作られたといういわくつきの作品である。

將軍家の姫君(その名が和姫)が小藩に嫁入りしてくるという設定で、城の櫓の上から、祝賀に集まった民衆の提灯行列に向かって若い二人が(十二単装束で)並んで手を振るというかなりキワドイ場面設定もあって当時話題になった。

和姫を美空ひばり。その身分の違いを笠に着る傲慢ぶりに困った若殿(中村賀津雄)が一計を画し、山中に住む獵師半助の「なあに、女は馴らしかた次第だよ、俺なら巧く仕込ん

でやる」の豪言壯語を聞いて、その気になり教育を任せる狂言を実行する。その獵師半助役が柳太朗である。まあ当時の長閑な時代劇映画の筋書きだから展開が軽く漫画的なのは気にしないことにしよう。

山中にさらってきた獵師はその妹と協力して、姫に炊事洗濯などの日常の家事を仕込んでゆく。初めは抵抗し何度も逃亡を計るがなにもぶんに深い山の中、ある時は熊に遭遇し、危ないところを半助に助けられる。またある時は山賊の一味に拉致されそうになり危機一髪のところ、半助が現れて山賊を追っ払う。そんなうちに山の生活に慣れ、頼もしく好漢の獵師に密かに恋心を抱くようになる。やがて城からの迎えの一隊が来るという時になって、姫は「何でも言う通りにするから、私をこのままここに置いてほしい」と懇願する。という映画であり、ラブシーンカット事件の起きたのはこれではないかと言われている。絶叫歌人の福島泰樹氏にまで気に入られている豪快、好漢の大友柳太朗なのだが、その実態というのは少し違っていたようでもある。

大友柳太朗後援会、「東京碧空会」のパンフレットをながめる機会があった。そこには昭和二十八年までの経歴が記されているので、その以降に作られたものだと思う。錚々たるビッグネームが並ぶ。会長に村上元三。顧問には辰巳柳太郎、佐伯清、山岡荘八、マキノ雅弘、島田正吾など。そしてそこ

に、これぞ大友柳太朗というような挨拶文も載っている。

私は愚鈍な俳優です。愚鈍なために人一倍の努力をしてきました。このたび、私のために後援会をつくって頂き、愚鈍な私に鞭打って下さるという。誠にありがたいことです。まだまだ何といっても井の中の蛙に過ぎません。皆様の御鞭撻を受けて、一層、廣い世界を体験して、皆様の御支援に應えるべく一生懸命勉強したいと存じます。今後共何卒よろしくお願い申し上げます。

ちよつと謙虚がすぎるのではあるまいか。後援会は叱咤激励、鞭撻するだけのものではない。暖かく見守り、温かく許し認め、援助応援する人の組織なのもある。わたしは、

誰か吾が後ろに立ちて鞭あつる如き心地す疲れも知らにという歌集『渚』の一首を思い出した。これは辛いだろうなと思わずには居られなかった。そして、

原罪といふはいかなる罪ならむまぼろしに鳴る鞭の音す
宮 柊二

という宮柊二のあまりにも有名な作品も頭に浮かべていた。小学生だった大友柳太朗に与えられた「性格は暗く寡黙」の指摘がまた、切なく思い出されてくる。

大友柳太朗の個性爆発というエピソードを一つ。すっかり

時代劇映画衰退の一九七〇年ごろ、NHKテレビが作った時代劇「鞍馬天狗」(高橋英樹主演)があった。シリーズとして長く続いたヒット作品だったが、その最初の方で大友柳太朗は出演した。ところがその役どころは、鞍馬天狗にあっさり斬られてしまう小物の侍だった。それを知った大友は「……ざーとやって参りましたが、悪役で斬られて死ぬというのは今までのない。いかにもこれは不名誉である。私の中で許せないものがある。ふんざりがつかん」と言って考えこんでしまったという。周りから様々説得されようとも、「鞍馬天狗に斬られて虚空をつかんで死ぬというのは納得いかん」のいつてんばり。最終的には、台本と違う、切腹して果てるということになったという話が『大友柳太朗快伝』にある。

剣豪スター大友柳太朗の晩年は、どうにも生き難い環境になつていったようである。長い映画俳優生活の中で、これといつて印象に残るような悪役、汚れ役をやっていないのが、大友柳太朗なのだ。

大友柳太朗の遺作となつた映画は伊丹十三監督の「タンポポ」であつた。ラーメン界の大先生の設定で、ほんのちよつとの出演。そのシーンの状況を伊丹は、ドキュメンタリー映画『伊丹十三のタンポポ撮影日記』(一九八五年)の中で、「大友さんは台詞を忘れるのではないかとチルのではないかという不安が非常に強い俳優だったのではないかと思う」と述べ、「まるで彼の心の中に叱る人が住み続けていて、常に彼を脅

迫し続けているかの如くだった」と語っている。

その映画を完全に撮り終わり、自分の責任を皆やり遂げたことを確認してから大友柳太朗は自宅マンションから墜落死を遂げた。一九八五年九月二十七日、享年七十三歳だった。本稿を書く上で最も重要視したのは『大友柳太朗快伝』で、一九九八年刊、「大友柳太朗友の会」の編。その逝去より十三年を要しながら、故人の足跡を辿る追悼の一巻である。A5判三四ページというカラー写真も含めたくさんの貴重な写真を掲載した豪華本。出版に携わった方々も多く、取材に応じている方々もまた多い。寄せられた手記等の追悼文も膨大で、十三年という年月を要したことも納得できる一巻。まさに大友柳太朗に関する資料ここに網羅したというべき質量であった。

そんな中でちよつとだけ気になったことを忌憚なく述べれば、最初に見た時の直感で嫌な感じに思えたのは、巻末の年譜の下段に配置されている故人関連の様々な写真の中で、一歳時の可愛らしいふくよかな写真なのに、その右端から、顔の鼻の下あたりを貫いてほぼ80%破られた跡が残っていたことだ。これも含めてたくさんの写真類は遺族からの提供であつたと記されている。なぜによりによって、こういう写真が破れ跡の補



一歳の太友（「大友柳太朗快伝」より）

修もされない状態で提供されたのか、わたしには分らなかった。確かに貴重な赤子時代の写真とはいえ、無理に使わずともよかつたはずである。実は本文295ページに配置されている「小学校一年生の太友」とキャプションの付く大きな写真にも、頭の部分に達する手前まで、左側から破られた跡が見えるのだ。可愛らしい子供時代の故人の写真の二枚に、このような傷の残っていることは不自然ではないか。

同年譜には、「仕舞を習う長男雅之（11歳）と大友夫妻」とキャプションの付く幸福感ある家族写真も掲載される。

仕舞とは能の一部を面・装束をつけず、紋服・袴のまゝ素で舞うこと。能における略式上演形態の一種。

と辞書にはある。「伴奏は地謡のみによって行われる」ともある。舞姿の少年の右隣に正座する大友柳太朗は「地謡」を担っているのであろう。更にその右には妻女が、そんな二人を見守るように座っている。

子息が十一歳とあり、昭和二十三年生まれということなので昭和三十四年頃の記念写真なのかと思う。大友柳太朗四十七歳にあたり、映画俳優としては「右門捕物帖」シリーズの当たり役があり、あぶらの乗り切った頃である。美空ひばりとの問題の共演「孔雀城の花嫁」もこの年の作品となっている。年譜には昭和十八年一月（31歳）に「大曾根澄子と結婚とあるが、この後は、妻なる人のことはほとんど現れない。子息は一人っ子で、音楽家であつたという。その子息も

平成二十三年十一月一日に肺の小細胞癌で亡くなっている。

享年六十一歳だったが未婚でそこに繋がる人はなかった。したがって今日、大友柳太朗に繋がる血筋は絶えているようである。中富（太友の本名）家の墓は、広島県江田市大柿町の浄土真宗東本願寺派「明慶寺」にある。

大友柳太朗年譜には、晩年この「明慶寺」に度々訪れ、時には講演などもしたとあつた。何が語られたかは不明だが、六十代半ばをすぎる頃は、同宗を代表するような高僧、藤代聴磨（としまろ）の講話を聴いて心を開くと記す。その教えはへこれからが これまでを決める」という言葉だった。

十代の半ばごろにはへあはれこの世はかりの世ぞ 喜怒哀楽は何んぢややら」と言っていたので、晩年に心を打ったこの具体的な言葉は、老を生きるよすがとなったことであろう。

へ人生とは、決して過去の過ちが消えるわけでもなく、やり直すことはできないが、今までの自分自身の在り方を見つめ直し、歩んでいく

ことらしい。キリスト教で言う「原罪」にも通ずる所があるが、この教えに沿って前向きに生きたという。ずっと抱き続けたきた「己が身に鞭打つ」思いからも解放されることになったのだろうか。遺された歌集『渚』をたどると、

誰か吾が後ろに立ちて鞭あつる如き心地す疲れも知らに
戀も金もはたまづしさもうち忘れたゝ狂ほしく仕事して

をり

苦しめよ苦しめよとてこの日まで生きて耐へ来し吾れなりし哉

誰もかれも吾れに愛なく見ゆる日よ疲れに疲れセツとを
出づる

スクリーンに動く貧しき吾が姿じつと目をとち息をこらすも

春来ると言ふに淋しきこの頃よやつれの見ゆる手鏡の顔
誰か世に火よりもあつき誠もて吾れを抱かん人はあらじかも
だせども希ふ所は一つなりたゞしやにむにに仕事をし
たし

思ふ事はた希ふ事戀ふることたゞ一すちに狂ほしくよむ

などが容易に挙げられ、その情が鋭く伝わってくる。

大友柳太朗は、生涯通して自身の在り方を追求し、弛まず自身を鞭打ち叱咤激励し、休ませもせず享樂に溺れずに生きた。豪放磊落な剣豪スターとしての演技に隠しながら、繊細に柔軟に己が「原罪」の如きと闘いぬいた。もしかしたら、先に触れた破られた子供時代の写真は、大友自身の手によるものかとも考える。所詮へこの世はかりの世ぞ」なのだ。

歌人大友柳太朗と『渚』は、もつと多くの人に読まれて良いかと真に思う。懸命に生きる一個の魂の真実の嘆きが、切なく響きあう若ものの歌集ではないだろうか。

（続）

作品一

桜井 美保子 神奈川

病院の敷地に河沿ひの小道あり待ち時間に来て木陰を歩く
対岸のビルの影響し揺らめける河の面に光るさざなみ
幾重にもさざなみ立てる水面を見てをれば頭の中が静まる
会計を待つ長椅子に坐らむとする人「よいしょ」と声を漏らしぬ
海苔巻きと稲荷鮭のセット温かき茶にてともかく昼飯とする
イートインの椅子に坐りてコンビニの弁当楽しむ十五分ほど
落ち着いて電話する場所院内にあらず玄関を出て木陰に寄りぬ
秋の陽の降り注ぐ道路きらめけり舗装に混じるガラスの屑か
「山百合の球根植ゑたよ片付けは明日にするね」ベランダからの声

正田 フミエ☆ 栃木

体調をくずし検査の妹に輸血二本の治療はじまる
浮腫とる治療も行う入院に妹の病気何かわからず
鉄分の不足の原因解らぬまま妹のやまい快方に向かう
二週間の入院治療の退院に明るく歩む妹見つめる
妹もわれも老いたる現実を気付かされたる体調の変化

斉藤 トミ子☆ 栃木

大会は二十年ぶりの参加にて緊張しつつ歌評聞きいる
東京駅の地下鉄網に目を見張る我が住み居しは半世紀前
目撃の情報有りの張り紙にラジオの音を響かせ歩く（唐沢山に熊）
連日の熊の被害の報道に恐れていたりついに佐野にも
知らず来て雲海を見る我が町が幻の如墨絵見るがに（唐沢山）
雲海に淡き光が差しきたり静かに動きやがてぼうぼう
畦道の草刈られて彼岸花咲きいる中を猪横ぎる
モネの池と表示されたる池に咲く睡蓮の花あの絵思わす

浜田 はるみ☆ 埼玉

今年は諦めていた爽やかな秋の季節がやつと来にけり
朝夕が涼しくなりて蚊の動き活発になり蚊取り器つける
万博に二度も行きたる七十歳我が三倍食欲もあり
頻繁に写メーる呉れる旅の友こちらでも楽しめ有り難きかな
好きだった丹下左膳の柳太朗が若き時より和歌作りしと
運動を三月^{みづき}続けてうっすらと筋肉つきて効果の見える
運動をしても疲れ変わらず今後の変化に望みを託す
この歳で体重増やすの難しく四月^{よつぎ}でたった六〇〇グラム

岩 渕 綾子 岩手

霜降に寒気襲ひて来たりけり老いたるわれは気もそぞろなり

をちこちに熊の被害が慌ただし本格的な施策が欲しき
盛岡の中心街に熊が出で来普通の暮らし妨げてゐる
東京湾アクアラインがなつかしや震災前に子らと行きしを
海ホタル海に浮かべてあなふしき老いたるわれには竜宮のごと
今朝もまた大船渡に熊出でぬ国の施策が早急に欲し

田 中 祐 子 ☆ 埼玉

猛暑日の夏の水遣り想い出し澄みたる空の庭先愛でる
ひたすらに長き治療を耐えて成す義妹の氣骨を眩しと見てる
氣弱なるわたしを稀に諫め呉る義妹の微笑みその母に似て
緊張の八十二歳を解きほどこ保健師さんの声やわらかし
帰り際この絵はどなたがと問い呉る今日は佳き日と頭を下げて
来客の多き日続きで疲れたり菓子を食べつつポカンとしてる
敬老を祝いて次男が赤い靴を買って呉る軽くて可愛い

倉 浪 ゆ み 埼玉

国政のトップは女性となりにけり川越市政のトップも女性
立石さん身丈プラス二センチと我はマイナス七センチなり
木犀のかぐはしき香漂ひて川越の町に祭り近づく
逝きし子が大好きなりし川越祭り偲びつつきく囃子は哀し
大雪でたふれし木犀のひこばえに花が咲きゐるこの嬉しさよ
次次に新しき店オープンし趣かはる蔵造りの街

町内の女性の会は和やかに世界情勢も話題となりて

こぶしの木

林 美智子 ☆ 東京

一本の美しいこぶしが公園の入口にありいつも見上げる
大きこぶし春には繊細な花をつけやがて赤き実今は黄葉
金色の葉が楽しげに舞い落ちる食卓から見る公園のこぶし
大きこぶし葉の落ちた後の枝先はレース模様のように広がる
青空にも月夜にも映え四季折々美しと思う大きこぶしの木
茄子・ピーマン下火となれる畑隅にハックルベリー伸びいんげん実る
だまし絵に宝探しでもするように藪々の中いんげん探す
植えたことも忘れられたるいんげんが実りて美味し食卓賑わす
若ぎらの弾むようなる足取りを遠く眺める秋の晴れた日

松 中 賀 代 ☆ 高知

草笛を巧みに吹く人の名は知らず入院仲間と人づてに聞く
その人を囲んで互いにリクエスト瀬戸の花嫁吾が好きな曲
リハビリの訓練室の南側稲作後に鳩の集団

本 郷 歌 子 ☆ 栃木

切株を取り巻き伸びゆく定家葛の白の新芽は宝冠の如
エクササイズのつもりで下腹に力込め大声を出すバスケットの応援
推し選手の調子は如何にと試合前シュートの練習じつと見つめる
避難リュックに荷物をぎゅうぎゅう詰め込んで火事場の馬鹿力に頼ると笑う

通りすがりに段ボール箱など蹴つてみる肩の痛みの半年続きて
秋の雨に睡蓮鉢の水満ちて葉先より雫の滴りており
日の落ちてカーディガンを重ねたり今夜は熱熱の豚汁が良し
ポツポツと地面に水玉模様でき犬連れた人ら足早になる

村上 美江 岩手

月を背に黄金スキの香合の蓋に螺鈿の鈴虫遊ぶ
右耳は職業病と聴きにくく耳掛け集音器の音に驚く
初めての集音器を耳に掛けハッキリ聞こゆる車のウインカー
音量を間違へる時「ピーツ」といふ嫌な音するこの集音器
集音器耳に掛けてメガネ付けマスクと帽子と耳は重くて
文字の横線小刻みに揺る仏熨斗の筆圧弱く吾が名を書けば
野アザミの歓迎受けてゆるゆるといこと歩む碁石海岸
雪色を静かに足して伊勢神宮旅路の出雲も白色重ねる

伊澤 直子 ☆ 東京

新進のバリトン歌手のリサイタル日本歌曲第一位受賞記念(佐藤克彦氏)
同郷の白秋の歌を並べいて詩心まっすぐ聴き手に届く
帰り際「また聴かせてください」と願いを告げて出でて来るなり
この度の正倉院展デジタルの巨大映像で時よみがえる
蘭奢待なる香りを体感するブースイにしえの香りに心ほぐれる
正倉院御物の文様現代に通じるモダンと美しさあり

ゴッホ展年代に沿って展示さる変化わかりて興味深し
印象派的色彩タッチが感じられパリからアル移りゆく画風

乾 義江 ☆ 茨城

いく道の稲田も刈られ蘂の生える田んぼに静けさ戻る
例年より一月早いインフルエンザ予防接種を急がなければ
自然とはなんと無慈悲か台風の八丈島に再度上陸す
照り映えるコキア真っ赤に色付きてひと尋程の球となりたり
降る雨の紫式部の実を洗う日毎寒さの増し来る庭に
二人目の妹の曾孫の泣く声が通話の向こうから伝わりてくる
連投の山本由伸危機救いワールドシリーズにMVP取る

永光 徳子 ☆ 東京

秋深き公園墓地は人気なく桜の枯れ葉ハラハラと舞う
多摩の山一望できる高台の銀杏の梢は空を突き立つ
日暮れには残照の富士撮りに来る写真マニアの三脚並ぶ
在りし日の夫は自慢のライカ持ち初冠雪の富士山撮りぬ
此の地区に多くの子供居りし頃枯れ芝の土手滑りて遊ぶ
陽だまりのベンチにかけて職人の刈り込み作業飽かず眺めき

ここかしこ

松本 英夫 東京

灼熱の日差しにつぼみ枯れたるもなでしこ秋に大輪の花
昼前に「おはやう」のごとひらき出す寒がりならむガザニアの花

あかあかとトーチもたぐる彼岸花くる年来る年いきほひ増しをり
空寒く皇帝ダリアの花たかし八つのピンクの花びらするどく
冬空に黒き枝のぶる紫木蓮つぼみを小さくふくらませをり
桜咲く初夏の気温に人々の顔のほころぶ三月の尽

ここかしこ白く小さき花かかげ雪柳あたらず春急かすらむ

穿ちたる淵の青深く濃く澄めり嶋田画伯の白き滝落ち（創展 潔水 kessui）

大塚 照美 兵庫

皇室の四十年ぶりとふ成年式の所作と語り口の沈着なり悠仁さま
近年の季節感なき移ろひに紅葉おそきさくら葉見上ぐ

わが暮らしにこののち着物は如何かと駢ありなしの和簞笥を閉む
墓参りの車の窓に見る景色永代供養を思ひ乍らに

補聴器が必要なる友これからはスタン・バイにて電話しますと
長男の肩と手を借り助手席を降りて大き息吸ふ秋日和のなか
従姉妹とわれ共に杖にてこの秋も音楽祭に来つ教会の

杖なくば直立叶はぬわが問ひに仁王立ちにとりハビリの師は
車椅子の姉と放せぬ杖のわれ会へる日あらむ互ひの最期

三好 規子 福岡

施設内にコロナ患者の出で面会外出風呂の禁止になりつ
幾日も外出できず部屋内や廊下を歩く時間決められて

納涼祭の出し物は主任の泥鰌すくひりーダーの獅子舞に施設長のマツケンサンバ

閑散とする秋月城址の石段を子に助けられ黒門へ登る

一面にひまはり彩る原鶴の道の駅にて選るシャインマスカット

筑後川流域の築場に見渡せば鮎は見えずに水流早し

我が部屋に見えぬ名月誘はれて向かひの部屋より媼と眺む

裾分けを禁止の施設とどきたる葡萄いちじく冷凍にする

失ひしものを思はずあるものに感謝しながら餘生を歩まむ

須藤 紀子 埼玉

熊撃ちの獵師はブナの苗木で深山に熊を生かさむと言ふ

道に斃るる親子の熊の傍らに居たとふ子熊ももう冬がくる

もそもそと側溝に入りゆく丸き尻狸は人につかず離れず

背後より近づく音のからからと一つ枯葉の我を越しゆく

好天に干し物するも知らぬ間に雨降りてをり日の照るままに

天気雨降るは狐の嫁入りか良きことあれや人も獣も

もう少し安くなるかと待つうちに秋刀魚の季節通り過ぎたり

駅への道教へくれたる少年が見送りてをり角曲がるまで

佐藤 靖子 東京

山梨のすもものジュース珍しと買ひきて気付く果汁一パーセント
都府県の名を冠むる品にすぐ引かる何か信用できる気にして

油揚げおかかばかりのだし汁に水菜のはりはり尽きず食べをり

二泊三日よりけふ帰る娘の子もはやと思ひやつと思ふ

前をゆく壮年男子この坂を立ち漕ぎするに我もとてならず
立ち漕ぎはふさはしからず八十歳に人のをらねばも一度ためす
報道の「熊居座る」はちとをかし熊は居るのみ悪意を持たず
熊親子逃げよのがれよ人の目の届かぬところ撃たれぬやうに
この年をしめくくるなら「拡」なるか龍角散を咽せながら呑む

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

新首相 ASEAN 会議の首脳らの真ん中に映ゆ白きスーツの
揃ひたる蕾の少し開きつつ白菊黄菊みな小菊なり

去年白いま薄紅に咲く小菊玄関先の不思議のひとつ

白菊に蜜蜂たちが騒ぎ舞ひ枯葉の色の蝶の降り立つ

赤黒きふたつ選びぬ秋映と名のつくりんご未知なる味の

秋映とふりんごは好みの酸っぱさと甘みと硬さまあまあよろし

挨拶に続く話は Y さんの裾に隠れる脛の包帯

うしろから来たる自転車に肩押され転んで怪我をしたる Y さん

鈴木 計子 東京

新しもの好きな祖父と父をりてテレビは早くわが家に来たり

午後九時に君が代流れ放送が終はりとなりつ当時のテレビは

大相撲みたくて来たる子らの坐す畳を祖父はよく拭きをりき

荷に添へるメモを入るるミニ封筒作りぬ色よき包み紙にて

一群れの信号の下の猫じやらし車の通るたびに揺れをり

閉まりたる電車の窓に手を振れる抱かるる幼遠ざかりゆく

越してより三十年経てなほ知らず東村山音頭といふを

われよりも若くて妻逝き夫逝き隣の改修工事はじまる

暑きころ始まる改修みつき経て隣りの表札けふ剥がさるる

石 渡 静 夫 茨城

開演の前に舞台の袖で待つ主催者挨拶覚悟を決める（文化芸術フェスティバル）

中原氏の彫刻展のトルストイ像反戦論者の視線鋭く（中原篤徳彫刻展）

幸福の王子の像の右肩に燕がとまり天使のやうに

鳴弦と名付けられたる女性像弓引く右手のしなやかに強く

クシャーナの末裔像の青年の眼は他を寄せ付けぬ求道者のごと

全身で社会に向き合い問ひかける無垢の予兆の学生像は

どのやうにしたら命を彫刻に吹き込めるのか興味は尽きぬ

文化の日布団を干して掃除機を念入りにかけ姉夫婦を待つ

姉夫婦が米を届けてくれた午後真壁言葉にたつぷり浸る

西 村 邦 子 兵庫

ゴッホ展アルル時代の展示ありゆかりの地巡りし南仏アルル

スマートフォン待ち受け青い空間にゴッホの「花咲くアーモンドの木の枝」

旧道の町の入り口看板に「おかえりなさい ようこそふるさと」

家並みは記憶のままに残りある賑はひたりしあの家この家

子供のころ通ひしそろばん教室の跡地にゆらゆら秋草茂る

鐘樓の屋根の下で雨宿り建て替へられて立派になりぬ
山里の深まる秋に包まれて父はは音なき雨に静もる

植松 千恵子☆ 静岡

ファミレスのタブレット注文支払いも便利と思わぬ店員を呼ぶ

隣人の逝去知らずに寂しいと友のラインに頑張れと返す

二刀流野球知らねど大谷の記録塗り替えは偉業となりしか

親指でさつさとスマホ打つ隣りの子操作の速さチラッと盗み見

臭い放ち神社の銀杏捨て置かれ昔は皆で競って拾いし

季節急く朝のウォーキング夜露に濡れ空気冷たく長き夏終わる

いざ^{ハルビン}哈爾濱 その3

永野 雅子☆ 東京

娘婿の実家の門をくぐりおれば我らに刺さる視線の多き

円卓に付きて親族紹介は延々と続く似た面立ち

乾杯とグラス傾け夕食の宴始まる山盛りの料理

中国語の分からぬ我はひたすらに耳を傾け黙々と食べる

前日より徹夜で迎えた宴の夜は長く長く重く感じる

コケコッコと雄鶏の声に起こされて午前四時半外は真っ暗

朝食後家族で記念撮影を笑顔が素敵な思い出の一枚

見送りの両親の涙にもらい泣き涙を拭いて改札を抜ける

川上 美智子☆ 高知

真夏日の続く十月川土手を辿れば秋立つ赤い曼珠沙華

赤と黒のコントラストを際立てて彼岸花に遊ぶ黒揚羽二つ
檜の木の下に飛び散るどんぐりのおびただしきや野道を歩く
バリバリと乾いた音を響かせてどんぐり潰れ足裏こそばし
山栗のイガを剥がして実を拾う里人達は見向きもせぬに
金銀の花を咲かせて見事なり空き家の庭に木犀二本
崩れつつ未来もあらぬ空き家から木犀の香のしみじみと芳し

川俣 美知子☆ 栃木

雨上がり光あふれて物干しに水のダイヤが煌めきており
何もかもセルフになりたるこの頃は戸惑いいつも脳トレ気分
倒れつつ暑さに耐えて菊がまた二つ三つほど赤き蕾を
朝からのどんより空に気が沈みえいと顔上げため息ひとつ
黄と白のビオラの花は植えたてで吹く風強く頼りなく揺れる
病院の待ち合い室にテレビ音小さく響き我はドキドキ
青空を悠々渡るカラスかな鳶に劣らぬ伸びやかさにて

大野 茜 神奈川

灼熱の日射に僅か十分も待てずに日陰に隠れバス待つ
新生姜を八百屋に見つけ求めたり妻の得意の酢漬けに二キロ
サッカーに打ち込む中二に箱詰め肉饅頭送る幾つ食べたか
頼りなきゴーヤの蔓のゆらゆらと風に吹かれつつネットを掴む
赴任地に母より届きし竹行李おもひで終ひ捨てると決める

十年目のエアコン替へて救はれる酷暑を忘れる心地良き風
会館の建設可否のアンケート賛成多数を待つ十日間
七夕の祭りの余興のウクレレを弾きつつ歌ふ団員八人

小林 貞子 山形

垂り穂はこがねの輝き日日褪せて低き雨雲刈取り阻む
ぬかるみに機械は無理と若き等が田植長靴履きて手刈りす
道沿ひの山田にびつしり猿が居て稲尻に敷き穂を喰らひをり
かぐや姫の罪とは何ぞ虹色の光冠の輪に白銀の月
ビーバームーン今宵は悼め熊共よ人を害して撃たれし仲間
晩秋の小寒き風に煽られて花影青く野菊群れ咲く
こんじきの実り田遥か見下ろして山裾に住む人の眼の福

本間 志津子 山形

くきやかに虹の片脚残る空しばし釘づけ西日の中に
白鳥の訪れ早く夕されば河口のあたりに鳴く声ひびく
隣家の青桐高く伸び立てり電線を越え秋の日を浴ぶ
北港に停泊中のクルーズ船ウェステルダム号を見学に行く
北風と時雨の中に人けなくクルーズ船は姿を晒す
クマが来る山の木の実が不作ゆゑ食べ物求め里へ下りくる
人間の家畜や穀物奪ひては次々食べて止むすべもなし
出くはせば人を襲ひて怪我負はせ殺しさへするクマの荒わざ

高橋 燿 子☆ 埼玉

木犀の茂みを杖でまさぐりて蕾を見つけた夫の笑顔
切り詰めて幹の太さを覆う枝家族皆が木犀大好き
去年はと父の留守のさまさまを子等は語り生日を祝う
飛び乗ったミニスカートの少女見る肝を冷やす駅での一瞬
見舞に通いたる頃懐かしむ検診の日の父子の会話
ざつくりと白菜二つに切り分けて迷いさりたり小春の日和
再起を祝う十五人ウッドバーニングに魅せられた夫の仲間
一年余りを埋めるかにそれぞれが成長見せるシニアの元氣
私なりにと作品創る決意述べ皆に出版促す夫

野崎 礼 子☆ 埼玉

あんバター甘き香りの変わらずに小ぶりとなりて丸福のパン
クリームパンングローブのごとき大きさに幼き我は目をかがやかす
丸福の牛乳パンのふかふかに笑い声まで昨日のごとく
新米の価格五千円に手が止まる年金暮らしにずしりと響く
豊作の年に下がらぬ米価格不思議に思う経済の謎
働いて働いてと言う新総理時代の流れに背を向けており
栄養と運動そして笑うことフレイル予防と医師の細き腕
癌ワクチンロシアに認可の報せあり侵攻の地に火の手止まねど
人間の英知の結晶癌ワクチン未来を拓く長き戦い

十一月号作品一評

小林 芳枝

映画館出でてゆると日常に戻りゆく
地下の食品売場 桜井美保子
映画の後は暗い中で得た感動が少しず
つ取れて体が軽くなってゆくような感じ
がする。地下の食品売場で現実に戻ると
いうのが主婦らしい。

長ながと車道に腹這う大きな蛇我が近づ
けば跳ねて逃げたり 斉藤トミ子☆
寛いでいる蛇を驚かせたのは作者の運
転する車だったのではないだろうかと思
像してみたが、驚いた蛇が「跳ねて逃げ
る」という様子が何とも面白く痛快な感
じがする。

かく乱に日射病に熱中症病名かはる時
代と共に 倉浪ゆみ

この歌を読んで夏の暑さのために体調
を崩すのは昔からあったのだと気付い
た。「かく乱」という言葉は子供の頃に
聞いたような気がする。昔から人は暑さ
に苦しんでいたのかもしれない。

十一月号作品一評

藤田 夏見

バス停で隣りは我より年長者おしやれ
なんだな青のペディキュア

バス停に並び隣に立つ年長者らしきひ
との手指に鮮やかな青のペディキュア。「お
しゃれなんだな」に作者の女心。

倒壊した家に見つかる品のなか千人
針に武運長久 岩渕綾子
倒壊した家に見つけたそれは捨てるに
忍びない思いで仕舞われていたのだろ
か。八十数年を経ての千人針、武運長久
の文字通り無事に帰還された方の物で
あったのだろうか。と想像をしながら昭
和三十年を過ぎた頃祖母の手に広げた千
人針を見せられた事を思い出しました。
無人駅の方の窓は開け放ち暑さを凌
ぐ団扇が一つ 松中賀代☆

無人駅には空調設備はないのだから。
いつまでも続く暑さに誰かが置いていっ
たのだろうか、開け放たれて尚暑い部屋

娘より日に幾たびもラインあり何でも
無きことやり取りしをり 三好規子

最近まで共に暮らしていた娘さんと会
話をしているように手軽にやりとりがで
きるスマホのラインは便利であろう。互
いの体調のことなども伝え合うことがで
きて大切な繋がりとなっているようだ。

取り込める濯ぎ物畳む正座して仏間に
掛かる写真を見つつ 林美智子☆
そういえば洗濯物を畳むとき私なども
正座になっている。仏になった人を仰ぎ
ながら心の落ち着くような時間になっ
ているのかもしれない。

八月は土佐のよさこいヨッチョレよ鳴
子の音が街を揺るがす 松中賀代☆
暑さの中で踊る人々の笑顔は見る人々
の力にもなって大きな輪が生まれるよう
な感じがする。「街を揺るがす」という
心の高まりが伝わってワクワクする。

予報では夕立あるを期待させ今日も空
振り水まきをする 伊澤直子☆
待ち望んでいる雨の予報が外れてがっ
かりすることが今年は多かったような気

にはひとつの団扇が置かれている。

予報では夕立あるを期待させ今日も空
振り水まきをする 伊澤直子☆
猛烈な暑さの夏でした。夕立の予報は
あるものの降るそぶりもなく恨みごとの
ひとつも言いたい思いだが、今日も植物
には水まきをしている作者です。

擦り切れた襟に布当て繕ひてまだ着続
けむ好きな服ゆゑ 須藤紀子
着心地のよく色合いもお気に入り服
なのだろう。季節が巡るとやはりこの服
と着て過ごして来た。襟のあたりの擦り
切れた部分の当て布はどんな工夫だろ
う。

よるべなき朝顔のつる水平になびきを
りつつ上を向く先端 佐藤靖子
よるべなき朝顔とは寂しい表現です
ね。地にひとり生えて蔓は捕えるべきも
のを見つけれぬまま水平に伸び、やがて
上を向く。なるほど筆者宅の朝顔のカ
ーテンから外れて伸びに伸びた蔓も水平に
なびきながら上を目指しています。
通るたび庭の水遣りするひとに白く咲

がする。重い腰を上げて水を撒く姿が浮
かんでくる。

海上を走る台風に待望の束の間の雨嬉
しくなりぬ 乾 義江☆

普通なら避けたい台風だけれども雨の
降ってくれることを期待して待ち望む。
ひと時の雨に救われる思いがした。

照りかけるも暑さの引かぬこの夕べ「雨
だ」と聲出づ庇うつ音 大塚照美
こちらは俄雨だろう。急な雨に感激。
初句は「照りかげり」で良いのではない
かと思うが大量の雨に降られた人も雨を
待ち望んだ人も苦しい夏だった。

休耕の田に大量の碎石がならされてあ
り家の建つらし 石渡静夫
暫く耕作されなかった田に碎石が敷か
れた。農地が消えてゆくことを寂しく見
ている作者の心が窺われる。

万博を通して分かった自分のことま
だ残りある体力気力 西村邦子
この夏の万博は「いのちの輝き」をテ
マに開催された。会場に行き、しっかりそ
の意図を受け止められた事が素晴らしい。

きたる花の名訊きつ 齋鹿ミヤコ

日課の水やりをするお宅のそばをいつ
も通るのだろう。白く咲いた花の名前を
聞きながら歓談をされたのだろうか。

ホームランは無論よけれど盗塁のフォ
ーム美し大谷選手は 鈴木計子
大谷選手の活躍には心が躍る。代名詞
の二刀流ではなく、盗塁のフォームの美
しさを讃えている。同感

長男は何でもしたと遠くを見る泣き虫
吾を背負いし事かも 高橋耀子☆
この長男とは長兄のことだろうか。一
昔前はヤングケアラーなどという言葉も
なく今なら虐待と言いかねられないが、
大人に混じって子供も家族の働き手でも
あった。「なんでもしたと」と遠くを見
るように語る兄上に作者は幼い日に背負
われた事を思い出している。

手のひらに刻む十字の印あり幸運を呼
ぶと今も信じたり 野崎礼子☆
一生懸命に生きて来てふと手のひらを
眺める作者。そこにある十字の印に希望
を見られている。幸あれと願います。

一月集

梶尾 栄子 兵庫

月明かりを歩く野道に聞こえる祭り太鼓の稽古の音は
枯草を頭に被きつつむくむくと曼珠沙華の葉畔に勢ふ
市を挙げてのクリーンキャンペーン少しづつポイ捨てゴミの減りつつありぬ
積み重ねある短歌雑誌の今日はやや乱れてゐるを揃へる図書館に
摘み来たるすすきと野菊を文机の写真の夫に置く秋の色
芝の上に銀杏と桜葉散り敷ける風の冷たき小径を歩む
太き蛇草生より突如這ひ出づるを跳び退く脚力未だありわれに
八十を切りと思ひてゐたりしに未だ少しいけさう今日の青空

東 ミチ 青森

昭和のうたの懐かしさ痛む膝さすりながら歌ふ「ケセラ・セラ」
「転ぶなよ」よく聞く言葉「油断するな」呟きながら居間に下りくる
眠るにはまだ早過ぎる散歩せむ赤い半月を斜めに見ながら
秋仕舞ふ庭に掛けたる蜘蛛の巣の見事な織りに払へず残す
根元から切られてしまふ紫式部名に憧れて育てゐたれど
ツハブキの輝き咲ける一株を守り花にして秋仕舞ひ終ふ

松居 光子 三重

作りたるてゐる坊主の甲斐もなく朝から雨のしとしとと降る
傘さして移動をするは煩はしくも人出少なき京の町よし
紅葉の盛りにはまだ早くともまつ赤な景より落ち着きのあり
真筆かと見紛ふやうな複製の曼殊院本古今集見る
遠き日に臨書せしこと憶ひつつ渋みある仮名文字に見惚れつ
品書きを見つつ味はふ手桶弁当彩りのよく趣のあり
帰途につくバスより眺むる山々に霧のかかりて墨絵のごとし

佐藤 幸子 山形

大の字に小さき花卉の寄り添ひて秋の陽に咲く大文字草
夕暮れてにはかに煮物が欲しくなり切干大根二袋程戻す
乱視に遠視プリズム異常白内障今宵の満月さへ卵のやうで
検査にて開いた瞳孔に昼陽射しふらく足でただ夫を待つ
太陽光が眩しく目を閉ぢ助手席にて夫に語りぬ見えぬ不便を
朝焼けの空眺めつつヨガのポーズ三つ四つ為せば体幹目覚む
目に見えぬ違ひを奥深く感じよと背中押し呉るヨガの講師は
絵画に書われら仲間の短歌などゆるりとめぐる雨の文化祭

藤田 夏見 ☆ 広島

全介助となりたる従兄の絶望アルツハイマーの進みゆく妻に
旨そうに従兄は三口栗飯を秋の彼岸の生まれ日に食む

死を見つめ始むる従兄を支えと心に決めて過ごしたる日び
富士を見る小川に摘めるクレソンをサラダに添える息子の家に
絶景と案内されたる寸又峽色弱の子に見える色はも

大井川川越人足の運びしと大井神社の玉石の垣

「お疲れさん」と子の劳いの旅の空連れらるるまま呆けておりぬ
忘れたるにはあらずとも金婚の日の過ぎゆきて日日是好日

津 田 美知子 岩手

枯れ芒の葉の先の露光りゐて近づく冬の氣に包まれる

早朝に秋思はせる風吹きて外さぬ風鈴心地良く鳴る

晩秋の蜻蛉の羽の痛々しスローモーション見るとく飛ぶ

スーパ一の自動掃除機淡々と人混みの中我が道を行く

百二歳の最後の数年施設にて「居心地良い」と言ひ呉れし母

化粧せぬ母の遺品のイヤリング思ひがけない大正生れ

思ひ出の昔の町並み話しつつ涙と笑ひの母との一日

松 崎 みき子 岩手

白壁に秋の陽ゆらぎ道沿ひの家に猫ゆく長き尾上げて

岸壁に停泊の船動き出すあまたの電球イカ釣りの海

黒々と焼け跡に雨降りしきる火災後の山は水吸ひ込めず

すすきに小舟隠れる気仙川アヲサギ親子中州まで飛ぶ

柿落し背を丸めて柿を剥き軒下に並ぶ百個の干し柿

物価高に都心暮しの子等案じ早起きの夫畑に働く

浜菊の咲きゐる岩場見上げれば椿は細く山に根づきをり

水 澤 タカ子 山形

九十二の齡にめげず秋野菜とり来て楽し生きがひとなる

球根を鼠よけにと植ゑにしを曼珠沙華いま生き生きと咲く

寺庭の彼岸花はも赤々と御講に参る人らを迎ふ

曾孫の誕生記念に植ゑられたる金木犀の香り寄りくる

酷暑にもめげずたわなに実りたる枝豆送らん名月用に

曾孫伴い遠刈田へ行く山道に紅葉の色さまざま愛でる

シート敷きおにぎり食ふれば遠足の頃思ひをり七ヶ宿湖畔公園に

井 上 鈴 子 山形

友と兄が行きしといふ千里庵の十割蕎麦を息子と食みぬ

千里庵は古民家のまま店となり母の生家と似てゐる間取り

菜の花と見紛ふほどの黄の花の背高泡立草の東陽の里

亡き友の金木犀が咲いたら庭より香りて花は見えざり

野草園の吾亦紅揺れ思ひ出づ「吾亦紅」の歌母の横顔

幹からの水分閉ざされ紅葉してやがては落ちる花水木の葉

十月は社の神の留守なれど神在月と変はらず参る

山も里も田舎暮らしのいいところ熊に盗られてひきこもる日日

十一月号作品二評

井上 萱子

寺の子はビジネスと言ふ一周忌新盆の
法要進む暑き日 本間志津子

暑さへの労いを言ったのだろうか。それに対して「ビジネスですから」という応え。寺の子と言えど今は、仏の供養もビジネスと捉えている。現代人の「こま。老いとても一家を仕切る一人居の我れの今月を簡条書する 東 ミチ

夫婦健在であれば手分けしてできるものを、一人暮らしは全てが一人に掛かる。「簡条書する」に、落度なきようにという凛とした姿勢が見える。

九十五歳が老後にやりたき事を言ふいつから老後か線引きできぬ 植松千恵子☆

九十五歳が老後とっていいなとところに注目しておもしろい歌。いつから老後か線引きできぬ、の主観も生きている。実りたるミカン重そうに下りおり少しもぎとり軽くしてやる 早乙女イチ☆

たわわに実ったみかんに撓る枝、重くて折れそうだと感情を込め、もぎ取って軽くしてやったところに出る人柄。

暑き日も湯浴みのあとはほつとする冷房疲れすつかり取れて 山本述子
風呂に入つて冷房の冷えが取れた、という内容だが、「湯浴み」という、柔らかで懐かしい言葉選びが効果的。

成田発哈爾濱行きの飛行機が遅延しその後の乗り継ぎ如何に 永野雅子☆
乗物が予定通り運行しないとき、一番心配なのが乗り継ぎの時間。哈爾濱という馴染みのない土地では尚更のこと。目的地を初句に置いて不安な気持ちが漂う。

朝夕が少し涼しくなりてきて酔芙蓉が
白い花を咲かせる 卯嶋貴子☆

酔芙蓉の開花期は、九月上旬から十月下旬という。朝夕が涼しくなってきたことと、酔芙蓉の白い花が爽やかに清げ。カチャカチャと忙しく打つ足音に老犬の爪の伸びたるを知る 藤田英輔☆
犬も大切な家族の一員。そして健康チェックも飼主の務め。毎日犬をよく見て

いるから爪の伸びも知る。足音で捉えた。打ち寄せて小石と共に引く波の基石の浜を飽きず眺めゐる 津田美知子

浜に打ち寄せる波は、波だけ引くのではなく小石も共に引いていく、ここに観察眼の確かさがある。基石海岸は美しい。クーラーの風を嫌ひて田に行くの外に出た夫五分で帰る 佐藤幸子

ことしの夏の暑さを「五分で帰る」と言い得ている。クーラーが嫌いでも外に出ても、五分が限度の酷暑であった。

「良子さん」と呼びなれた名も届かぬ所つめたく花の中に埋もれて 谷田律子☆

友人の棺に別れを惜しんでいる様子が詠まれた。つめたくなつて花の中に埋もれて、本当に届かない遠さを言つて、悲しみの深さが声なく伝わる。

歌友より貰ひたる花咲きいだす赤いろ
ピンクの百日草 野口秀子

百日草は丈夫で長い間花を楽しませてくれる。「咲きいだす」には、期待していた花がようやくに、の思いがある。

十一月号作品二評

江波戸愛子

田や畑を街を潤す雨が降る四十日の日照りの後に 本間志津子

待ち望んでいた雨によるこぶ作者の笑顔が見え声が聞こえてくるようです。田や畑の農作物の生き生きとしてきた様子が目に浮かんできます。

昔むかし「冬雷青森」の会ありしこと急に偲ぶる歌作りいて 東 ミチ
青森県に冬雷の会があったということ

をこの歌に教えていただきました。厳しくも楽しい歌会だったのではないでしょううか。豊洲の歌会に通つていた頃を懐かしく想い出しました。

伝え聞く我慢の戦中耐え難く戦後八十年平和に感謝 植松千恵子☆

舅から戦争の悲惨な体験を何回も聴いたことを思い出しながら読ませていただきました。舅の体験を娘や孫たちにも伝えていくことの大切さをあらためて思いました。平和に感謝の言葉を添えて。

実りたるミカン重そうに下りおり少しもぎとり軽くしてやる 早乙女イチ☆

結句の「軽くしてやる」の表現が楽しい。軽くしてあげるためにもぎ取ったミカンの味はとも甘く美味しかったことでしょうね。

洗濯機突然に鳴る異常音二十余年にお
疲れ様言う 加藤富子☆

家族のために二十余年も働いてくれた洗濯機に労いの言葉をかける作者の優しさ伝わります。

月一度共に麻雀保養所で待ち遠しいと言ひし友逝く 山本述子

最近麻雀を楽しむ女性が増えていますが、一緒に楽しんでいた友を失った悲しみ、寂しさが結句によく判ります。

朝食を嫁の用意に頼りしが今朝は独りにて味噌汁つくる 児玉孝子☆

前月号に手術を受けたと詠む歌がある退院をされて家族への感謝の気持ちを感じ、ようやく台所に立つて味噌汁をひとりで作ることのできた喜びを詠む。

打ち寄せて小石と共に引く波の基石の浜を飽きず眺めゐる 津田美知子

波の音には癒しの効果ストレス軽減効果があるという、ご自分の親より長く暮らした義母を亡くした作者の心情をお察しいたします。

「こんにちは」と坊主頭の男の子熊鈴
鳴らして走りゆきたり 佐藤幸子

作者のお住いは山形県、住宅地にも熊が目撃されているという、子供たちが熊鈴をつけずに外出できる日が待たれる。

九月よりロスにて学ぶ孫のこと知らせてくれる娘のライン 小嶋知葉☆

動画にて今朝も明るく語り合うニューヨークにて働く孫と 小嶋知葉☆

アメリカで働くお孫さんとの会話はお互いの顔を見ながら、そしてこれからアメリカの学校に通うお孫さんの事はラインで。アメリカが身近に感じられる。

八十路にてまだ夢を追う今日のごろ他人の視線気にしつつも 谷田律子☆
いくつになっても夢を追う前向きな生き方が素晴らしいです。

十一月号作品三評

山本 三男

庭の隅よりケセランパサラン追いなが
ら白くふんわり風と歩きぬ

高藤朱美☆

ケセランパセランという言葉には不思議なイメージがありますが、それをよく活かしている歌です。庭の隅という現実の場所から幻想的な世界へ入って行くような雰囲気があります。

炎天に茄子の葉も実も萎れたりひと雨
欲しいと畑の黙す 塚本節子☆

今年の夏は暑さに加え、雨の降らない日が続きました。畑を擬人化した結句が印象的です。茄子の葉も実も萎れている炎天下の畑を見て、思わずひと雨欲しいという切実な思いがでています。

外国で水を買うこと教えられ八十路を
過ぎて水を買う吾 山崎 猛☆

日本では水道の水が飲めるのは当たり前ですが、このような国は実は少なく、外国では水を買って飲むケースも多いよ

うです。八十路を過ぎてという表現に作者の思いが込められています。

トラクターの泥を落として油さしグ
リース塗ってオイル交換す

越澤太朗☆

トラクターの手入れの手順が具体的に詠まれていてリアリティのある作品です。作者のトラクターへの愛着を通して、農作業への誇りを感じさせます。経験した人でなければ作れない、まさに自分の歌と言えるでしょう。

日焼けの児らの歓声ひびき光るしぶき
やさしき川の音あの夏何処

松田忠一☆

最近ではこのような光景は見られなくなりしました。やさしき川の音と歌ったところに作者の思いが表れています。川で遊んだ児童の姿は作者自身の子供の頃の姿だったのでしょうか。

畝をたて小さき種蒔き土被す秋蒔き大
根の季節めぐりて 長谷川 剛

毎年この季節に秋蒔き大根の種を蒔くでしょう。その作業が丁寧に詠ま

いて、確実にめぐる季節と共に生活する姿が読み取れます。

朝顔は命繋いでこの年も肥塚覆ひ枯れ
草隠す 長澤千恵子

この朝顔はこぼれ種で毎年咲き続けているのでしょうか。肥塚の肥料が豊富でよく育っているようです。人の手の入らない場所所自然に循環する生命力を感じさせる歌です。

子を持たぬ友を羨む日もありて夾竹桃
の赤目に沁みる 手賀稔子☆

何か迷うような心境を感じさせる上の句に続く、下の句の鮮やかな色彩が魅力的な歌です。作者は今、どんな思いでこの夾竹桃の赤く咲いている花を見詰めているのでしょうか。

にちにちの出来事を短歌にする途端些
細なること非凡となりぬ 鈴木裕子☆

短歌を作るとは、こういうことなのですね。この後に続く作品はいづれも作者の日常生活から生まれた佳作が続いています。こういう短歌に対する姿勢は見習いたいと思いました。

十一月号作品三評

橘 美千代

暮れ残るひと時にして所在なく施設の
外を一回りする 佐々木政子

夏の日の暮れそうでなかなか暮れない刻を上る句に活写し、どこか虚しさの籠もる「所在なく」に繋ぐ。外を一回りするには施設の自室にまだ一人籠る気になれない作者の孤独が潜んでいるのか。

真上なる息子の書齋物音す午前二時に
も明け方までも 立石節子☆

一晩中起きていると思われる息子さん。何か心配事でもあるのか或いは仕事で溜まっているのか。不穏な感じがして気にかかる作者。畳みかける下の句が緊張感を高める。何か胸騒ぎがして読者も見過すことができなくなる。

三十八度日の照るなかに里芋の葉丸く
縮みてうなだれてをり 塚本節子☆

三十八度超えの猛暑が続く、あの大きく瑞々しい里芋の葉が何と丸く縮んでしまっている。信じられない光景を今年、

筆者も見つた。里芋に投影して、うなだれているのは作者自身かも知れない。

稲の穂のしだれはじめて田のひかりひ
ぐらしの声遠くかすかに 塚本節子☆

前の歌とはうって変わって豊かな実りを予感させる一首。穂を沢山つけ頭を垂れる稲。黄金色に波うち光る田となり秋の実りの歓喜の時へと。何処からか微かに聞こえるひぐらしの声が心に沁みる。ひらがなが続くので、ひかりは光か光りと表記した方がわかり易いのは。ハウス棟の収穫終えたるミニトマト支柱もろとも根こそぎにする

越澤太朗☆

ハウスに手塩にかけて育てたミニトマトであるが、収穫後は未練なくばっさりとは始末するという。下の句の激しさに驚ろかされた。この潔さは。次の作物を育てる準備があり猶予してなどおられないのかも知れない。

酷暑の日暮れて月無き天の川夜間飛行
の明りがわたる 松田忠一☆

上の句と下の句の対比の妙。酷暑の一

日がようやく終わり、月の無い夜には天の川がよく見える。上の句の写実が巧みだ。そして夜空を渡りゆく飛行機の点滅する灯りが叙情を誘う下の句へ。

社からでつぽつぽと鳴く声す静かな
朝の目覚めの合図 今野澄子

姿は見えないが、社の森の方から山鳩の鳴き声が聞こえてくる。聞きなしの「でつぽつぽ」がユニークだ。朝の目覚めに聞くその声は夢と現実を繋ぐかのよう。数本の百日紅の花咲きにけりもうおしまひとあきらめたる朝

和田妙子

猛暑のためなかなか花をつけなかったのだろう。今年は咲かずに終わるかと諦めていたところ花をつけた。些細なことだが作者の心を明るくした。筆者の地では猛暑の中百日紅だけがよく咲いた。

陽だまりに呼べど応えぬ老犬の瞳の奥
に我はまだおり 手賀稔子☆

老い衰えて死期の近い老犬と過ごす残りの時間。陽だまりの中で。一首静かな悲しみに満ちている。もう見えない老犬の目は今も愛する作者を映している。

島木赤彦生誕150年記念事業

第1回『島木赤彦短歌賞』実施要項

【目的】 島木赤彦は、長野県における教育者としての多大な貢献と、『万葉集』を祖とする日本の伝統的な短歌を守りつつ、新しい創造を目指し、正岡子規の写生道に基づきその徹底を説きアララギ派の歌風を樹立した中心的な存在であったといえる。その功績を検証し、資料保全と、調査研究・顕彰を目的として、昭和45年に「島木赤彦研究会」を設立した。本会は、研究・顕彰の一環として、講演会や島木赤彦文学賞、文学新人賞、島木赤彦「童謡」コンクールなどをおこなってきた。

本会は設立50年を経て、来る令和8年は久保田俊彦（島木赤彦）の生誕150年と没後100年の節目の年を迎える。

そこで、久保田俊彦（島木赤彦）生誕150年記念事業として、従来の島木赤彦文学賞・文学新人賞及び島木赤彦童謡コンクールに加え『島木赤彦短歌賞』を創設し、短歌の世界への多くの方の参加と活性化を図ることとした。

なお、この事業は今後も継続していく。

【主催】 島木赤彦研究会、下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館

【後援】 下諏訪町

【応募資格】 小学生以上なら可

【応募規定】 短歌のテーマは問わないが、自作の未発表作品に限る。

・短歌に使用した漢字にふりがなが必要な箇所はつける。
・応募数は2首を上限とする。

【審査】 ①小学生の部、②中学・高校生の部、③一般の部、3部門に分けて選歌する。

〈賞〉《生誕150年記念短歌大賞》各部1首（3名）賞状・作品集

《生誕150年記念短歌優秀賞》各部1首（3名）

《下諏訪町町長賞》3部門全作品から1首

※《審査員特別賞》3部門から必要に応じて1首

※《下諏訪町長賞》下諏訪町にふさわしい作品1首

（町長に候補から選んでもらう）

〈副賞〉 図書カード

【応募方法】 応募用紙に短歌と住所氏名等の必要事項

（学生は学校名と学年）を明記の上、郵送もしくはEメール添付にして応募する。

★応募用紙など各様式は、ホームページからダウンロードできます。

★学校用応募用紙には、学校名、学校所在地、電話番号、担当教員名と短歌作者の氏名、学年を記入して下さい。

※作品の一切の権利は、島木赤彦研究会に帰属します。

※応募の際に記入された個人情報、島木赤彦短歌賞に関することのみに使用します。

※既に発表されている短歌や歌詞等に類似する場合は、入賞人選を取り消すことがあります。

【応募締め切り】 令和8年1月15日（木）必着

【発表と表彰式】

発表…令和8年3月上旬（予定）

入選者および代表者のみに通知します。表彰式後、ホームページにて短歌作品、氏名、都道府県、年齢、（学生は学校名と学年）を公表します。

表彰式…令和8年3月29日（日） 下諏訪町立諏訪湖博物館・

赤彦記念館で開催

短歌大賞、優秀賞の受賞者の皆様を表彰式へご案内します。

【審査員】 会長を含む会長が選出した歌人、学識経験者等

【郵送応募先・お問合せ先】

【本部事務局】

江戸川大学 中島金太郎研究室内

〒270-0198

千葉県流山市駒木474

【長野県支部事務局】

茅野市立長峰中学校内

〒391-0013

長野県茅野市宮川1128

※ E-mail : info@akahiko.org

※ ホームページ : https://akahiko.org

★ご興味のある皆様は、自信をもって応募願います。

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長 高橋 克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。

●投稿などの機会が得られます。●（年会費二五〇〇円）

●本部事務局 江戸川大学 中島金太郎研究室内

〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四

☎ 〇四（七一二）〇六六一（代表）



作品二

小林 芳枝 東京

もう一度宮古に帰りたいといふ願ひ叶はず逝きてしまひき
明け方の高速道路に沿ふ土手に揺れて華やぐ芒の花穂
てのひらの窪みに乗せてかすかなる骨を沈める宮古の海に
心経を低く唱へてふるさとの渚に沈むまでを見送る
在りし日の姉を語りて涙ぐむ人にちひさく頷くばかり
枝打ちをされて間直ぐに立つ杉の幹うつくしく斜面より立つ

益坂 順子 福岡

秋らしくなりたるひと日雨降りて庭をいろどる苔のひろがり
庭に在るさほど大きくなき石に苔まとはりて眺めととのふ
誘はるる行藤山は蛭多き山の記憶のよみがへりをり
山頂の展望たのしみ何気なく靴下に付く蛭見つけたり
意を決しやや肥りたる蛭つかみ塩をかけたる敵討ちぞと
心地よき尾根の歩きに突然にスズメバチの螫す吾の手の甲
スズメバチの恐怖のゆゑか脱力の我に付き添ひくれたり友の
下山後の全身おほふ発疹に眠れぬ夜を薬に頼る

加藤 富子 ☆ 栃木

旅行中のパーキング笠間の店内は棚いっぱいに栗と芋の菓子
太平洋の荒波受けし六角堂松の林に石路光る
小砂利にて敷きつめられたるアプローチ一本の鉄砲百合咲く五浦美術館
早朝の半覚醒で耳にするシヨパンのメロディいいことありそう
鉢植えの数多の薔二・三輪日毎に開く野ポタンの花
食材が集まりたればおでん鍋我には調理の大役のあり
我家と共に四十年木斛の樹は伸びすぎて伐採決める

児玉 孝子 ☆ 愛知

雨上がり畠にすれば秋茄子の色冴えており選びてもぎぬ
姑の植えたる柿の食べ頃となりて小鳥は試食している
真夜目覚め用足しせんと起きたれば腓返りに縛り括らる
「みつけカフェ」に身障者の多く席をとるみんな良い子と保育士は言う
年齢は三十歳くらいか幼な顔肩揉みやればにつこりと笑む
鰯買いいき味にせんと煮付けるに焦げてしまいぬ少しはなれ居て
報恩講迎える準備の佛具磨き力はなくとも気持で磨く

山本 述子 神奈川

小一年生朝一番に口を開け昨夜に前歯抜けたと見せる
小三の女子新しき手袋の模様が猫だとかちらつと翳す
命日に秋の野芥子を手向ければやさしい笑顔返し呉れたり

落葉踏みしめウオーキングすしやりしやりしやりの音にハミング添へて
 みかん狩り鈴なりみかんの挽ぎ放題一杯楽しさも詰める
 シクラメンベランダに置き咲き初むる濃き桃色にやさしさ偲ぶ
 黒豆の枝豆届き早速にビールとともにふる里偲ぶ

藤田英輔☆高知

麗らかな晩秋の日に現れる何処に居たのかインディアンサマー
 思慮深き面差しをして夕陽受く後部座席のチャイルドシートで
 十三夜の不完全なる薄月を眺める幼は手を握り締め

エアコンの室外機より出る風は小春日和に木枯らしのごと

ダンプカーは早明浦ダム現場へと走り行きたり午前三時に

卯嶋貴子☆東京

熱を出し六人の隊員に抱えられ救急車で病院に運ばれる夫
 強風が吹き荒れて木々を大きく揺らし道路に数多の枯葉を散らす
 大鉢のカニバサボテンは小さな蒼つけて十二月に花いっぱいになる

安川敏子☆埼玉

鉢植えのビオラが咲きて背丈ある菊の花もポツポツ蕾をつける
 青みかん可愛らしいので五日観て黄色になったら甘味を味わう
 しゃがみこみ肋を押さえ声をあげ痛みをこらえ病院に行く
 とりあえずバストベルトで安定す痛みも少し薄らぐ様な
 ベランダで遥かに高い空見わたして蚊ほどの痛みと気休めを言う

何故かしらつつじが今日も狂い咲き三ヶ所寄り合い二つ三つ並ぶ

京の秋の怪我する前の写真見て笑顔に心癒やされている

紅葉狩り祇王寺の苔むす山門に清盛と祇王が並ぶ苔庭楽しむ

小嶋知葉☆茨城

今年度の郷土作家展は彫刻家中原篤徳氏流大の教授

間近にて十八点の彫刻に向かえば作者の息吹きが迫る

作者言う「辿り着きようなない世界」少しの笑みを静かに浮かべて

「見なければ勿体ない」と思いつつラインを送る親しき友に

楽しみは土曜十時の音楽会多彩な企画音の世界へ（題名のない音楽会）

奏者から「オケの心臓」と言われたるティンパニーの音フィナーレ飾る

低き音倍音となるコントラバス音に恋する気持ちかわかる

青空を一人でながめ五十分夢心地なり飛行機も飛ぶ

奥山清子山形

夜をこめて鳴く虫の音に癒さるる夫なきわれを慰めむとや

供華なれば秋明菊を惜しみなく夫の遺影を覆ふ紅

夜もすがら降りゐし雨の音止みて黄金色に障子染まりぬ

草陰に密かに咲ける杜鵑草に肩の痛みを告げて詫びをり

酷暑にて錆色なりし紫陽花の十月の雨に紅極む

輝ける母の笑顔で目覚めたり今日一日は良き日にあらむ

「庭の千草」上手にうたふ母なりき露草の藍見つつ偲びぬ

インフルエンザワクチン接種を依頼する直ぐに受けたく掛かりつけ医に
夫の逝き一周忌になる秋の日に心鎮めてみ仏に花を
新幹線に二駅越えて先輩が天童に来てくるは嬉し
朝早く愛らしき鳩の三羽ゐて飛び跳ねたりす広き駐車場
前撮りにカメラマンの指示できぱきと振り袖姿の孫は二十歳に
西窓の水色の空に浮かび来る初冠雪の朝日山輝ふ
亡き夫の納骨済ます快適な日に娘たちが寄り静やかになる

台風の襲来もなく街路樹の葉のあをきまま十月となる
街路樹の南京櫨の緑濃く秋の日ざしに照り返すなり
緑葉の南京櫨の梢にはさく果の爆ぜて白き種子みゆ
いちはやく紅葉ち初めたり花水木わが団地内道路に沿ひて
紅葉たひの早さ遅さのある木々の色合ひ違ひを見るは楽しき
立枯れて伐られし跡に植樹なき並木の道の眺めさびしき
森治ひの倒木多き遊歩道いま舗装され問道となる
わが町の北に望める普賢岳ひろき斜面の紅葉少なし
照葉樹多き森にてそこかしこ紅葉たふ樹木ちらほらと見ゆ

秋風に揺れるが似合うコスモスを見つつ毎年歌う「秋桜」

一言のラインの返事にスタンプに思わず笑う姉の語彙力

真っ白な小蕪の浅漬け葉の緑冬の始まる覚悟する朝

終活のひとつを決意す木々の葉の一枚ゆれることも無い日に

「二十一世紀の森」の広場に寝転んで真上の空を見つめておりぬ

「二十一世紀の森」の広場に寝転べば度胸の持てる我に戻る

年末になる程時は加速され二ヶ月分の予定を入れる

小糠雨よ「アイ・アム・サム」に浸りたし止むことの無くこのまま暮れて

どこからか木犀の香り漂いて後ろを振り向きその木を確かむ

高齢化に園芸の会解散し予定が一つ消えるカレンダー

駅中の書店なくなり楽しみが消えて寂しき時の移ろい

食べたいのはナポリタンとポロネーゼ日時はさておきメニューだけ決む

一針に思いを込めて出来上がるパッチワークのソファカバー

コロナ前コロナ明けを基準にして話が弾む友との会話

雨上がりお墓参りは涼やかに亡夫と語らう命日の朝

葉の落ちて白玉砂利に絵模様が静かなる寺朝露香る

日めくりの「牛乳を注ぐ女」見る生日を祝うフェルメールの絵

日めくりの二十四日は「地理学者」どてら姿にジャポニズムあり（フェルメール）

二泊する息子の食に変化あり健康志向の気づきにほっとす

「優美」なるトルコキキョウの花言葉生日に友の慈愛受けとる

山頂に雪の衣の富士を見て文化祭への準備は弾む

ドジャースの二連覇達成さすがなる最終戦のやりきるを学ぶ

山崎 猛☆ 埼玉

遠き日のロボット作り懐かしく今の回路への変遷を見る

今だけを見つめる吾に九年後の孫の笑顔が脳裏に浮かぶ

オーロラが日本で見られる現象に地球の変化計り知れなく

霜月になりて賀状の欠礼を知らせるはがき複数届く

算数の宿題やるよう言われたる孫はスマホ持ち見る間に済ます

トラックを発進せんと下見れば四人のおさな児ままとして

戦争を知らない人に見て欲しい白黒映画の「聞けわだつみの声」

立石 節 子☆ 東京

同級会減る事あれど増えることなし名言なれど奇跡起こさむ

墓前にて父母想い夫思い出すいのち継ぐ孫燥ぎて遊ぶ

障がいを持ちつつ生くる方々と四国四県三日の旅す

リーダーの一人の母は我に言うこの子を残し死に切れぬと

温かき恵みのうちに生かされて感謝と喜び静かに味わう

羽田 孝輝 山形

熊熊と声高にメディア報道す偏向目立つニュースに見入る

声高に熊の駆除を叫びをる人間共の身勝手極まる

挽がれずに腐れて落つる柿の実を熊が喰らへば食害と言ふ

寝たきりの親友の顔にわれ添ひて同級会の写真を見入る

五十年寝たきりなれる親友に古稀の祝ひの写真届ける

古稀迎へ無理せず気負はず我慢せず気の向く儘に生きむと願ふ

急激に冷え込み増せば夏の日のあの猛暑さへ懐かしき朝

塚本 節 子☆ 茨城

国税調査書きてしみじみ願いおり五年のちにも続くしあわせ

管理機の拗ねて動かぬ一ヶ月秋晴れ続く畑を眺む

管理機に耕やされゆく小さき草土の香まとい沈みゆきたり

修理待つ管理機の代りに長き刃の三本の鍬を買ってきたりぬ

三本の鍬振るうひととき腰の痛み思わず忘る秋の畑に

あちこちに湿布貼りたる夕まぐれ畑きれいになりて嬉しも

十四年半津波に不明の娘の遺骨を抱き締めている親あり九月に

「帰り来てくれてありがとう」遺骨抱き父母涙する九月のひかりに

井出 裕 子 静岡

観戦前地下食堂で「ちゃんこ」食む両国国技館での楽しみのひとつ

懸賞旗いくつ出るとか数へゆく皆で声合はすもまた愉しくて

同郷の熱海富士にエールを送る「せーの」を合図に四股名叫びて

隣席に相撲の詳しい人のみて解説聞きつつ観戦楽しむ

容赦なく体と体ぶつけ合ふ二階席まで音響き来る

作品三

全集・選集・著作集

新井 光 雄 ☆ 東京

八十路過ぎいよいよ別れか捨て時か全集・選集・著作集まで
バイトして買った専攻哲学の講座の全集岩波書店の
就職し本を買うにも余裕で岩波古典の大系二種を
亡き母の遺品となった十巻余短歌大系どう扱うか

編集が東大の師の岩波の日本思想史五十巻余も

半分か否ほとんどが分からぬまま悔しさ秘めるサルトル選集

シモーヌよりザバヤ著作集いまの我が身に何を語るや
憧れがあつたのだろうか東欧の文学全集十三巻あり

手にすれば今も心の落ち着けるチェーホフ全集捨てられるのか

越 澤 太 朗 ☆ 茨城

掘り起したる落花生「おおまさり」生の香りと土の匂いす

塩ゆでを山にして盛るどんぶりにあつという間に殻の山積み

落花生の今年の作柄問い合わせ品薄なのでよろしく頼むと

菊祭りに今年も協賛する直売所「おおまさり」の追加に袋詰めする

良品種一粒一粒選り取り網かごに入れ大事に保存す

焼き芋の準備始める秋空に友の笑顔を浮かべて励む

釜はよし薪よし石も黒光り火を入れて見る「紅はるか芋」

後 藤 恭 介 ☆ 茨城

手塚治虫の「アドルフに告ぐ」読みており戦争の悲惨と独裁者の最後

銀座にて子と孫達とイタリアン米国の話アニメの話

東京開催の世界陸上見て思う体格の差は大きいかなと

ファミレスで先輩二人とランチ会パソコンの話健康の知恵

参加したる敬老会は喜寿以上余興は「おかめひよつとこ踊り」

藤枝と掛川に行く秋の旅実家に寄って城下町見る

掛川は多くの場所に椅子ありて高齢者にはやさしい配慮

秋灯火新知識学ぶ講座受くSDGSや法律の知恵

片 桐 美穂子 ☆ 神奈川

皇室にゆかりの御苑は静かなり来園者にも品位求める

プラタナス並木を歩けば落葉が木枯らしに舞い視界さえぎる

寢室のゆかに草の実落ちてゐる そうだ子どもと草むら走った

ひと茎に五百の花を咲かせたる菊づくりの労報われる秋

御苑にて空を仰げば巨樹の先高層ビルより風格帯びる

朝顔の苗を引き抜き土ならすチューリップ咲くさまを描いて

松 田 忠 一 ☆ 山形

凍て空に招かれざる客来るように散居の郷に雪降りしきる

「甦れ」としおれしわれに呼びかけて紫露草夜明け濡れ咲く

夕風に吹かれつつ咲く白萩のかたえに燃ゆる送り火淡し

十一月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

マンションの配水管の清掃日フアンツ

きベストの作業員二人 森藤ふみ

炎天下舗道に弾ける子等のこゑ水かけ

神輿を担ぐ一団の 櫻井一江

ゴールとは近づく吾にニッコリと手を

振りながら遠ざかるもの 富田眞紀恵

小雨降る一日となりて和みたり猛暑の

もとの草木と我 山口 嵩

大空の息吹きのごとく降りそそぐ富士

見が原の満天の星 天野克彦

八十年前のひもじき経験がガザの子供

の映像に見る 嶋田正之

一日に一匹くらいは庭に捕るバッタを

つかむコツを覚えて 山本三男 ☆

爪もめば血流改善するといふ何時まで

生きむ爪もみてゐる 姉川素枝子

賑やかな所好まぬわねがら来てみれば

楽し新庄まつり 井上菅子

朝顔と蛙と蜥蜴らわねがまく水を分け

合ふ八月の日 井上楨子

十一月号 十首選

十一月集・残響集 山口 嵩

蜂蜜に黒にんにくを漬けこみて朝晩摂

れと友言ひくれし 小林貞子

谷底の冷気たつぷり含む風下草なびか

せ林道に来る 川上美智子 ☆

空は秋暑さ残れど軽やかな風ふくなか

に秋をおぼえる 川俣美治子 ☆

止むを得ず「デイ」を休んで七ヶ月今

日再開す全てが新鮮 安川敏子 ☆

この暑さ命の危険と日日聞けど早くも

おせちの広告のあり 梶尾栄子

八月は被爆日本の役目あり核廃絶を世

界へ訴ふ 水澤タカ子

子も友も郵便すらも来ぬひと日敬老の

日の静かに暮るる 益坂順子

降り続く雨が一氣に秋呼びて冬の仕度

を案ずる九月 羽田孝輝

朝日岳のつてんは立木たき番外地緑豊かな

なわが住む「立木」 児珠純子

新トップ翼和希のまなじりに覚悟と決

意静かに燃える 片桐美穂子 ☆

黄金地にみどり織りなす散居村真昼の静寂を白き風わたる

いつの間にか黄金の穂波消え果てて刈田の夕暮れ人の恋しく

夏の音秋冬の彩うつせみに薫りのこして友一人旅

裸木の梢を揺らすこがらしの雪の先触れ風笛を聞く

久方に蔵王の湯の郷訪ぬれば年の瀬の雪肅々と舞う

長谷川 剛 山形

裸木に三つ四つ残る柿の実を啄む小鳥枝から枝へ

柄杓のごときクレーン操り三万人の里芋を煮る芋煮フェスティバル

戸を繰れば金木犀の香りして行く夏惜しみ秋来るを知る

色付きたる満点星の雪囲ひ足早に来る冬を迎へむ

雪吊りを終へたる家の守り松和傘を差して佇む如し

暫くと隈取り鮮やかに見栄を切る声するやうな菊人形なり

鷺一羽刈田において落穂食ぶ行く秋惜しむ長閑なる時

夕餉時旅先の妻にメールして電子レンジの温め方聞く

長 澤 千恵子 山形

刈り時に雨降り続き田の土の挟り取られて水溜り居る

大根のおろぬき捨てず総菜を夫はどんぶりひとつ食べた

紅き葉が風に吹かれて舞ひ落ちるはらはらはらと冬支度して

霧深き八幡平の輪郭に白き物見え冬の始まる

窓の外の紅葉深し一枚の絵画のごとく迫る山やま

十一月号 十首選

作品一 石渡 静夫

長時間保冷キープを背に胸下に収納べ
スト畑と買う 正田フミエ☆

暑き日田んぼの稲の元気なく畦の荒
草だけは生き生き 斉藤トミ子☆

人間の愚かさを知る核保有相互被害を
分かつて尚持つ 浜田はるみ☆

記憶無き父を何処とはなく重ね観る森
繁さんの昭和の家族 田中祐子☆

ブルドッグ児童期のあだ名かわいいに
縁遠く鏡あまりみつめず 矢野 操☆

目の奥の冴えて眠れぬ夏の夜に暗がり
見つめてふくらはぎ揉む 鈴木やよい

まかしときと夫は言ひてくれたりきそ
の時夫に任せしは何 稲津孝子

クロスワード・パズルの一つ解けぬま
ま窓の夕日落つわれを尻目に 大塚照美

ガラス戸に触れる手のひら温かく夏の
日差しを哀ふを知る 須藤紀子

吾の為すすべてを許容してくれる夫に
唯ただ感謝する日々 江藤ひさ子

晩秋の硫黄吹く地で岩盤に温みを貰ひ体を癒す

今 野 澄 子 山形

絵手紙に「生でおいしい」の玉葱と添書き遺し友は旅立つ

断捨離の中の小皿のいとほしく見返ししてはまた手に戻す

切り餅を選びてゐればこれいいよと人の推すままわれも買ひたる

裸木の側に立ちゐる錦木は深紅に染まり澄む空に映ゆ

秋風の甘き香りを運び来て金木犀の花零れ落つ

友逝きて優しく強くの絵手紙にはじける笑顔の姿重ねむ

雪害に芯より折れたる百日紅枝伸びゆきて花咲かせたり

河原木 光 子 広島

押し入れに眠れる布より選び出しこの夏三着ブラウスを縫う

それぞれの誕生日に焼くチーズケーキレシピのメモは色褪せており

年の経て枝伸ばしたる藤の花小さき鉢にて娘に託す

町内の祭りの売店人群れて秋刀魚の塩焼き二百円なり

名を呼びて声掛けくれる人のあり初に参加の緊張和らぐ

駅近く娘と二人のランチするチーズサンドは東京の味

はとバスの二階に座れば風強く娘の長髪乱れて靡く

児 珠 純 子 山形

十五夜と母の命日重なりて雲間の月にかんばせ想ふ

教科書に母が筆字で書きくれし日下部純子今も懐かし

十一月号 十首選

作品二 大塚 亮子

信号の点滅見つめるやかに時の過ぎ
ゆくただ中にある 本間志津子

昔むかし「冬雷青森」の会ありしこと
急に偲はる歌作りあて 東 ミチ

盆用意義母の口伝を守り継ぐ迎え火焚
きて安寧祈る 植松千恵子☆

柚子の実が高高と生り見上げれば色つき
はじめ朝日にかがやく 早乙女イチ☆

雨の雫の落ちゆく様を眺めおり緩やか
にして時の過ぎゆく 加藤富子☆

ペランダの観葉植物は久しぶりの大雨
受けて息ふきかえす 卯嶋貴子☆

「ユニクロ」夏シャツ売り場のすぐ横
にダウンベスト並ぶ九月朔日

あと幾度この日あるらむ鷹野湯に夫
九十一の生日祝ふ 奥山清子

ばたばたとサンダルの音走りくるラジ
オ体操の夏休みの児ら 井上鈴子

日焼け止め流るるほどに汗かきて浴衣
で向かう朝顔まつり 大塚雅子☆

作品三 天野 克彦

真上なる息子の書齋物音す午前二時にも明け方までも 立石節子☆

「手のひらを太陽に」から元氣もらう 昭和平成令和の今も 高藤朱美☆

親のからだ支えし手なり八十路過ぎ今は吾身を支う手となる 山崎 猛☆

売り場には豊漁のポップが人を寄せ換気扇から秋刀魚のにおい 金子八重子☆

懐かしい線香花火をもう一度子どもに還り火花散らせたい 首藤文江☆

喜寿の妻を祝ひて孫子集ひたり祝着纏ひて夜の更けるまで 長谷川 剛

茄子貰ひお茶に呼ばれて語り合ふしくじり話や思ひ出話 長澤千恵子

親と子は影を追ひかけ遊びをり老いたるわれらは子育て偲ぶ 今野澄子

子を持たぬ友を羨む日もありて來竹桃の赤目に沁みる 手賀稔子☆

孫が來た電話の母の弾む声「腰は痛いし足も痛いし」 鈴木裕子☆

毛筆で書かれし母の年賀状美しく並ぶ夫とわれの名親譲り書くといふこと好きなれど筆は持たずにボールペンのみ丁寧心を込めて宛名書くわれの出来るささやかなこと初滑子持ち来てくれる人の言ふ熊・猿・狸・猪のこと雪囲ひ終はりて茶飲みのお供には山形名物玉こんにやくなり今秋も來たか我が家に亀虫よ厳しき冬を生きてゆく為一匹の亀虫見つけ騒ぐ人万匹とともに冬越すわれは

手賀 稔 子☆ メルボルン

いにしえの姫の名負える月探索機かぐや照らせる月の裏がわ月巡る務め終へたる月面にかぐや眠りて砂塵となりぬ太古の海ひそむ氷の影とらえ月の記憶を未来へ繋ぐ

鈴木 裕 子☆ 千葉

ホームから夕暮れの富士あまりにも見事にそびえスマホ取り出す東照宮返納不要と聞いたのち午戌巳と御守り買い足す

帰路のバスおにぎり頬張る学生も家ではきつと飯が待ってる

野村万作の映画をレイトショーに観る五人の客とグミを分け合う

老木に花を咲かせて人間国宝野村万作まだ月を見る

日曜のレイトショーは午後七時まで「サザエさん」観て明日に備える

「好きなどこ100は言えるよ今すぐに」甥と私の猫好き合戦

秋の日はつるべ落として長くなる夜を讀書で過ごす楽しみ

(☆印は新仮名遣い希望者です)

歌集／歌書
御礼

編集室・佐藤靖子

■洞口千恵歌集

『芭蕉の辻』

令和七年八月五日発行の第二歌集、二〇〇六年以降の作品より五五四首を収めた。東日本大震災前と後、父の死、最後に自身の青春時代の恋人との濃厚な記録といえる歌という段取りになっている。宮城の初等教育史に重要な役割を果たした、国語教育者祖父の導きのように東北大学で国語学を専攻した著者。「短歌人」同人。使っている語彙に特徴があるように思えたので挙げてみる。

春の砂にあざりは深く眠りあむ塩乾珠の

ひかりを帯びて

河口より夕闇は来ておほいなる時の暗境

になだれ込むみづ

しろたへの袖朝羽振り夕羽振りだれをさがしに來る鸞娘

停電の三日に知りぬひかりとふ無尽蔵なる日靈女のちから

仙台でなく仙臺に帰りたしわれの荒野を

たがやさむため

「青」二題。

凍雪を踏みしだきつつ直青に昇りくるおと聴より聴く

冬空の純青きはまれる朝を昇りゆきたし

素数階段

東日本大震災。

震災に生き残りたるやましきの穴深みゆくひととせごとに

役人に「動くがれき」と言はれけり被曝

をしたる牛のいのちは

著者の特技。

井戸浜のはるの潮風たてがみと乗蘭のす

そなびかせてゐき

(六花書林刊)

■金子貞雄歌集

『蛙の第九』

令和七年八月十一日発行、令和元年から七年三月までの三一七首を収める第十一歌集である。第十歌集は未だ進んでおらず、本著が優先された。これでもかこれでもかと病に襲われ、家族に余命らしきものが告げられたと後書きにある。「作風」代表。

日常的に地球を案じていることが、主に水を通して詠われている。

水田を潤してなほあまりたる水を悪水呼

ばはりをする

水を敬ひ恐れ願ふと川土手に丈余の黒きいしぶみを置く

人を葬りごみを受け入れ核しまふ墓場ばかりの水の惑星

一万発余の核弾頭を抱きたる水惑星の自己崩壊を思はぬ日なし

残波岬に立ちて思ほゆマニラ沖に水漬ける父と数万体を

春の小川の縁に膝つき水際に生えて豊かなクレソンを摘む

タイトルとなった歌ほか。

コロナ禍に疲れた人びと眠らせて蛙の第九夜通しつづく

ひかへめなさみどり色を楽しみます木蔭のシダの強き生き様

生きたし。

たとふればクーラー一台の買ひ替へに平均余命も判断の基

戦死せし父の分までとりかへす八十四歳まだ生きたりぬ

クレソンが摘めること、シダのやわらかい

緑を楽しむこと、これが平和の姿というもの

だろう。平易であり、よく伝わった。埼玉文芸賞から旭日双光章まで計八度の受賞歴あり。

(作風叢書第161篇 いりの舎刊)

「自分の歌」を詠もう

桜井美保子

「冬雷」は一九六二（昭和三十）年四月、江東区深川で発行人の木島茂夫によって創刊された。「下手でも良い。自分の歌を詠め」という木島の教えを基本姿勢として引き継いでいる。歌にはその人の生き方や人間性が滲み出る。一人一人が「自分の歌」を確立するために、そして「自分の歌」を深めるために「冬雷」は結社としての力を注いでいる。

現在、大山敏夫が代表を務め、発行所と編集の業務を担っている。事務局を小林芳枝、広報を桜井美保子が担当する。またこの三人が選者を兼任。運営は合議制で八名の編集委員があり、重要な事柄は編集委員会で合議し決定する。

結社としての特色の一つは二〇〇六年から取り組んでいる印刷データの完全内製化である。つまりインデザインというソフトを使い、パソコン画面で組版と編集を同時に行う。印刷製本会社に完成データを渡した後も、そのデータを保存管理して再利用することも出来る。「冬雷短歌文庫」シリーズ三十冊、二〇一七年版から二〇二三年版まで七冊制作した「冬雷作品年鑑」も、そうした蓄積データを利用して。またホームページでは最新号を毎月掲載し、会員にも好評である。歌会についてはホームページで「ネット歌会」も開催されているが、創立の頃より連綿と行われてきた本部歌会の形を休止し、会員の在住地域で小さな集まりを充実させてゆく方向が取られている。二〇二五年に「川越冬雷歌会」が立ち上げられ、活発な活動が続いている。

毎月の誌面作りも着実に進められている。各選者が手書き原稿を全てパソコンに打ち込み、メールで来る原稿と合わせて作品欄データを作成。この後、委員による画面での校正チェックがある。各欄の作品

データが編集室に集められ編集組版が行われる。その後、事務局に担当が集まりゲラの校正を行い、完成したデータを印刷会社に渡す。このデータは広報でも受け取って最新号掲載の準備をする。以上ざっと述べてみたが毎月の活動の流れである。

「冬雷」への入会は事務局へご連絡を。ホームページの「入会案内」からも申し込める。短歌が好きで、短歌に興味を持った人を歓迎したい。

代表歌10首

一年をさくらの花にはじむるは幾年ぶりか今年の表紙

大山 敏夫

朝毎に唱ふる般若心経を今日はなぞりぬ文字ひとつづつ

小林 芳枝

陸から船へ歩み板渡る少年のぐらつかぬ足 運河展の写真

桜井美保子

湯上がりに爪切りをれば母おもふ爪だけはよく伸びると言ひし

森藤 ふみ

茶の稽古ある日は友の育てある草花貰ふ早起きをして

大塚 亮子

母にはひ孫われには孫の誕生を待つは希望よ未来みつめて

橘 美千代

スイッチを押すよう言葉を切り替えるここはカナダだしやつきりせんと
ブレイクあずさ

中村 哲也

陣馬の滝描かむとしてキャンパスに下書きの筆強く走らす

嶋田 正之

緑青の噴きたる「墓誌」に刻みある安万侶の文字尊かりけり

天野 克彦

編集後記



▽新年おめでとうございます。嶋田正之氏が描いて下さった表紙絵「シャインマスカット」に力をもりながら一年間頑張つていきたい。▽冬雷カウンターが設置されて各欄の出詠者数が「見える化」した。出詠者百名時代も迫つて来ている。健全な運営を続けるため、まずは休詠を避けて無理のない範囲で投稿を継続しよう。選者は常に皆様の作品を心よりお待ちしております。

(桜井美保子)

▽皆様、新年おめでとうございます。今年は嶋田正之画伯の表紙絵「シャインマスカット」と共に頑張つて参りたいと存じます。テーマとなった春日井建作品は歌集「未青年」所収です。画伯がこの歌をあげて葡萄の絵を描いたことは2011年にもあり、二回目のテーマとなります。歌の中にある「葡萄のみどり」はシャインマスカットではありません。たしか前回も描かれた葡萄は紫の「房」でした。▽本号より作品欄「残響集」を無くし三欄特選作品は「月集欄」に合併させます。

▽皆様明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。▽毎年一月号は表紙絵が楽しみです。瑞々しいシャインマスカットに元気を貰いながら一年間頑張つてゆきたい。▽今年は午年、十二支では7番目、六十年に一度の丙午に当たる。行動力や活発さ、前向きに進む力を象徴する年と言われている。自分には当てはまらない事ばかりだが希望を持つて前に進みたい。▽編集長の連載は8回目。様々な人物を演じる役者としての大友柳太朗の内面を解きながら人の心の奥深さを考えさせられる。表面には現れない胸中の苦しみは結果としてその人の優しさや思慮深さとなつてゆくものではないだろうか。自分に対して大変厳しい方だったようで次回も楽しみである。(小林芳枝)

▽御寄附御礼申し上げます。

稲田正康
匿名二氏

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額(購読料を含む)次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

*会費は原則として振替にて納入する事。

- | | |
|--------------|--------|
| A 作品三欄所属会員 | 一四〇〇〇円 |
| B 作品二欄所属会員 | 一七〇〇〇円 |
| C 作品一欄所属会員 | 二〇〇〇〇円 |
| D 維持会員(二部購入) | 二六〇〇〇円 |
| E 購読会員 | 八〇〇〇円 |
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

- | | |
|-------------------|-----------|
| 冬雷集・作品三欄(メール投稿分) | ・担当 大山 敏夫 |
| 作品一欄 | ・担当 桜井美保子 |
| 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分) | ・担当 小林 芳枝 |

- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に依じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Eメールでの投稿案内》

- 白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- Eメールによる投稿は左記で対応する。
- | | |
|-------|-------------------------|
| 大山 敏夫 | tourai-oyama@nifty.com |
| 小林 芳枝 | kysie@nifty.com |
| 桜井美保子 | mihoko496@s4.dion.ne.jp |

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026 年 1 月 1 日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向

冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
33	32	30	12	107
()	()	()	()	(- 4)

* 上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。